

ロバート・バートン  
『憂鬱の解剖』  
第1部 第2章 第1節

岡 村 眞紀子  
川 島 伸 博 訳

第1項  
憂鬱症の原因。  
原因としての神。

「原因について考察を終えるまでは、治療について語ったり、治療法について考えたりすることは無駄である」、かくガレノスはグラウコに助言した。他の医師の共通の経験からも、原因が最初に追究されていない治療法は不完全で、不十分、的はずれであることは確かで、プロスペロー・カラーニが枢機卿カエシウスに献じた論『黒胆汁』で述べた所見は的を射ている。フェルネルは「原因に関する知識が必要であり、それなくしてはいかなるありようの病も治したり、防いだりすることは不可能である」としている。経験医学派も病を和らげたり、ときには治癒を助けたりもするが、病を完璧に根こそぎにすることはできない。諺にもあるように「原因が取り除かれることによって、結果も同様に取り除かれる」。そうは言っても、疾患が由来するこういった原因を識別し、さまざまな原因がある中で何が最初のものだったのかを言うのは極めて難しい。それを正しく為しうる者は幸いである。私は敢えてそれらをできるだけ正確に推測し、一から十まで、一般的なものから個々の種に固有のものまで列挙して、それらがよりよく見つけ出せるようにしよう。

一般的原因は、「超自然的なもの」か、「自然的なもの」かのどちらかである。「超自然的なもの」とは、「神から」と「神の御使い天使から」、あるいは「神の許しで悪魔から」、そして神の司牧からのものである。神自身が罪の罰の原因であり、その罰が神の正義の充足であることは、聖書での多くの実例や立証によって明らかにされる。「愚人は罪と弱さゆえに病に罹る」（『詩篇』107:17）。ゲハジは癩を病み（『列王紀下』5:27）、ヨラムは下痢や赤痢、腹の大病に罹った（『歴代誌下』21:15）。ダビデはその民を数えたが故に病に罹った（『歴代誌上』21）。ソドムとゴモラ

は硫黄と火に呑み込まれた。そしてこの病は特別詳細に記されている。「主は悲嘆で彼らの心をくじいた」(『詩篇』107:12)。「主は彼らを撃って狂気に陥らせ、盲いさせ、心を狼狽させた」(『申命記』28:28)。「悪なる霊が主によりサウルにもたらされ、彼を悩ませた」。ネブカドネザルは牡牛のごとく草を食らい、「その心は野の獣のごとくになった」。異教の逸話もそのような罰に満ちている。リュクルゴスはその地の葡萄を切り倒してしまったためにバッカスによって狂気に追い回された。ペンテウスとその母ヤガヴェは犠牲を捧げることを怠ったために、同様の目にあつた。監察官フルウィウスは、フォルトゥーナに捧げた自分自身の新しい神殿を覆うために、ユノーの神殿のタイルを剥がした廉で気がふれ、「心の悲哀、悲嘆で死に至らしめられた」。クセルクセスがデルポイのアポロンの神殿から、そこにあつた無限の富を略奪せんとしたとき、雷が天から来たりて四千人を撃ち死に至らしめ、死を免れた者は気がふれた。その少し後、同様の神聖冒瀆に際し、稲妻、雷鳴、地震がプレヌスに起こつた。我らがローマ教皇派の著作家達を信ずるならば、彼らの聖人達によって下されたこのような類の不可思議で奇怪な罰についての話を、飽きずに我らに語ってくれるであろう。ドジュベールの息子であり、かつてはフランス王であつたクロドウェウスが、聖ドニの身体の被いを剥いだ故にいかにも正気をなくしたか。ビルブルジュで聖ヨハネの銀の像を盗むところであつた神聖冒瀆のフランス人が、いかに突然狂気に陥り、暴れて自らの身体に暴虐を働いたか。夜遅く猟から帰って犬達を聖アヴァン教会(ラン・アヴァンと呼ばれていたが)に留め、翌朝、常に猟師達がするように早く起きて見に行くと自分の犬がみんな狂気に陥つていて、彼自身は急に盲になつたというランドールの領主。神聖な修道女を迫害した廉で、気がふれるという同様の罰を与えられたアルメニアの王ティリダーテスについて等々。しかし詩人と教皇派とは作り話をでっちあげるといふ点で同じことをしているのだから、真実の話だと取り繕うなら好きにさせておこう。彼らがいかにネメシスをまた聖人を装おうとも、あるいは悪魔の業に騙されていようとも、「神は背後からの復讐者」とダビデが称するように「主は復讐の神」とは真実である。そしてまた狂気や他の多くの病を我々の頭に惹き起こすのは我らの捨てておけない罪であること、さらに神が御使い天使により、意のままに撃つたり治したりできる(とディオニシウスは言う)ことも真である。神は、被造物である太陽、月、星々を自らの道具のごとく使って我々を苦しめることができるが、それは農夫が手斧を使うのと同様である(とザンキは言う)。また雹、雪、風なども同様である。

#### 風は進軍の合図に大挙してやってくる、

ヨシュアの頃、あるいはエジプトのファラオの治世のように。それらは神の正義のあまたの実行者にすぎないのである。神は最も高慢な人間達を屈服させ、「ガリラヤ人達よ、汝らの勝ちだ」と背教者ユリアヌスのごとく叫ばしめ、あるいはまたクリュソストモスの著作においてアポロンの司祭のごとく「おお天よ、地よ、この敵はどこから来るのか」、これはいかなる敵か、と叫ばしめる。そしてまた神の力を認めてダビデのごとく祈らしめる、「我は衰えはて、ひどく打ちのめ

された。我は、我が心の悲しみ故に呻き叫び、我が心は苦悩している云々」(『詩篇』38:8)、「おお主よ、憤りのうちに我を譴責することなかれ、怒りのうちに我を打ち懲らすことなかれ」(『詩篇』38:1)、「喜びと楽しみを聞かせたまえ、汝が打ち砕いた骨が喜ぶように」(『詩篇』51:8)、「我に救済の喜びを戻し、我を汝の自由な霊で支えたまえ」(『詩篇』51:12)。かかる原因故に、おそらくヒポクラテスはある医者に、病が超自然的な神的原因から生じていないかどうか、あるいは自然的経過を辿るかどうか、特に注意を払わせようとしたのであろう。だがこのことは、フランシスコ・デ・ヴァレスの『神聖哲学』8章、フェルネル、J・カエサル・クラウディヌスによって、さらに詳しく議論されているので、ヒポクラテスのこの箇所をどのように理解すべきかについてはそれらの著を参照してもらいたい。パラケルススは、そのような霊的病(彼はそう呼ぶのだが)は、霊的に治されるもので、他の方法によるものではないという意見の持ち主である。そういう場合には通常的手段は役に立たない、神に対しては逆らい得ないのである。怪物も手なずけるヘラクレスがオリンピアの試合で全てのもを打ち負かしたとき、最後にユピテルが、それとはわからぬ姿で彼と闘った。勝利の行方は定かではなかったが、ついにユピテルが正体を現すとヘラクレスは屈した。至高の力に挑むことなどできないのだ。

**医者に莫大な金の山を差し出しても無駄である。**

医者も医学も役に立ち得ず、「神の強い手のもとでは我々は屈せざるを得ない」。自らの罪を悟り、神に慈悲を求めねばならない。もし神が我々を撃ち、「ひとつの同じ手が傷と治療とをもたらすなら」、アキレスの槍で傷を負った者についてと同様、助けられるのは神のみである。でなければ我らの病は不治であり、我らは救われない。

## 第2項

**霊、悪天使すなわち悪魔の本性についての脱線、  
また、それらがいかに憂鬱症を惹き起こすかについて。**

霊や悪魔の力がどれほどまでに及ぶか、またそれらが憂鬱症やその他の病気を惹き起こし得るかどうかは重要な問題で、熟考する価値がある。これらのことについてもっとよく理解するために、霊の本質について少しばかり脱線することにする。その問題は極めて漠然としていて、ポストテルの言葉に従えば「矛盾や曖昧さに満ち満ちていて」、人間の能力を超え、アウグスティヌスも「正直なところ私の理解力を超えている、すなわち、有限の者が無限のものについて語ることはできない」と述べる。ケケロの『神々の本質』にあるように、霊が「何であるかより何でないか」についてなら、よりたやすく規定することができる。また我らが精妙なスコラ学者達、カルダーノ、スカリジェ父子、深遠なトマス派、フラカストロ派、フェルネル派はこういった不可思議には弱くて鈍く、曖昧で、理解及ばず、そして俊敏な知性の最たる者ですら、太陽の光のもと

での梟の目のごとく、どんどん鈍くなって、それらを理解することができない。しかし、以下に見るように、私はこの点についてあえて少しく述べてみようと思う。『使徒行伝』23に見るように、かつてそのような悪魔や天使といった霊がいるということをサドカイ人は否定していた。医者ガレノスや逍遥派、アリストテレスその人ですら同様に否定したが、ポンポナッツィは頑強に主張し、スカリジェはある程度認容した。イエズス会士のダンディーニは『靈魂論』2巻註解で頑固に否定しているが、**離在実体**も知的存在もキリスト教徒が天使と呼び、プラトニストが悪魔と呼ぶものと同じである。というのもプラトニストは全ての霊を良し悪しに拘わらず、ダイモンと称するからであり、それについてはユリウス・ポルクスが『用語集』1巻1章で考察している。エピクロス派と無神論者とは、両者とも決してそういった不可思議なものを見たことがない故に、大体において同様に否定している。プラトン、プロティノス、ボルピュリオス、イアンブリコス、プロクロスは、トリスメギストゥス、ピュタゴラスやソクラテスを範とし、それを疑うことはない。ストア派も、真実から大きく反れてはいるが、そのような霊があることには疑念を抱いていない。そういった霊のそもそもの起源に関して、タルムード編集者は、アダムがイヴと結婚する前にリリスという妻をもち、二人からは悪魔のみ生まれたと言っているが、トルコ人達の『コーラン』も霊の起源については同様不合理で馬鹿げている。しかし聖書が我々キリスト教徒に教えるところに従えば、悪魔の首領ルシファーは仲間と共に傲慢と野心故に天から墮ちた、神によって造られて天に置かれ、かつては光の天使であったのに、今では低く月下の空気の領域あるいは地獄にと墮とされ、「闇の鎖につながれ、永遠の断罪におかれた」（『ペテロの手紙下』2:4）のである。また、霊は死んだ人間の魂で、善き人や高潔な人の魂は神格化され、卑しい魂は地を這い、あるいはさらに低きをさ迷って悪魔ともなる、という愚かな意見もあり、その考えはテルトゥリアヌス、哲学者ボルピュリオスと共に、マキシムスが『説教集』27で「天使とか悪魔とか呼ぶこれらの霊は死せる人間の魂にほかならず、まだ生きている友への愛や憐れみを通じて友を助け、あるいはまた友の嫌悪する敵を懲らしめる」と主張している。

至るところに我が影は及び、汝は罰を受けることになろう、

と、デイドーがアエネーアスを苦しめると脅したように、霊は、人を誕生のときから、付き添い、護り、必要とあらば罰するという役割を、より上の力によって与えられている、と考える者は他にもいる。それらをローマ人は善き守護神または悪しき守護神と呼び、ストア派は善き守護神ならヘーラーズやラレース、悪しき守護神ならレムレースやラルウァと呼ぶ。アプレイウスは国や人民、都市の支配者と呼び、次のように言う、「もともと人の身分にいた存在で、正しく慎重に人生を歩み、その後人々から神として受け容れられ、神殿を建て儀式を行って崇められたものを神と呼ぶ、エジプトのオシリスなどのようなものである」。カペラは「王侯同様に特別な人々をも護った」ものをプラエスティテスと呼ぶ。ソクラテスは土星的で火のような霊をもち、それは全ての霊の中で最上で、プラトニストが考えたように、魂を至高の思念に高める。プロティノス

には彼の守護神、そして我々キリスト教徒には我々を助けてくれる天使達がいる。この主題について広範な著書を著したアンドレア・ヴィットレリも、大著『守護天使』でイエズス会士のファン・ルイス・デ・ラ・ケルダも、またザンキやその他の神学者も同様に考えた。だが、マキシムスの馬鹿げた考えを、プロクロスはその著『魂と霊』において全面的に論破している。

かつて東ローマ皇帝ミカエル七世の個人教師であった（とシュピーシェンメルは言う）キリスト教徒プセルスは、悪魔の本質についての優れた論著で、悪魔は身体をもつ、すなわち「空気の身体」をもつので、「死すべき存在である、つまり生きて死に（この考えはマルティアヌス・カペラも同様に支持しているが、我々キリスト教徒の哲学者達は論駁している）、よって食し排泄もし、傷を受ければ痛みも感じ（カルダーノはこの説を容認、しかしスカリジェはこの説を侮蔑して、「それらが空気を滋養とするならば、なぜより純なる空気を求めて戦わないのか」とプセルスを一笑に付しているが、それは正しい）、また、打たれたときも痛みを感じる」。さらにその身体は切断されたとしても驚異的な速さで再び元どおりになると主張する。アウグスティヌスは『創世記註解』、『自由思想』3巻で同様に認めて「悪魔の身体は墮落により、空気度の濃い、より劣悪なものへと変えられた」とし、ヒエロニムスも『エペソ註解』3章において、またオリゲネス、テルトゥリアヌス、ラクタンティウス、その他古代教会教父達も同様に、墮落に際してそれらの身体はより空気度が濃く粗雑な実体へと変わったのだとする。ボダン『自然劇場』4巻やデイビッド・クルシウス『ヘルメス哲学』1巻4章はいくつかの議論を経て、天使も霊も身体をもつと論証している。曰く、「空間に存する者はすべからず身体を有する。霊は空間に存する」、故に「もし霊がその中に数え挙げられるなら、それらは身体を有することになる。それらはその中に数え挙げられる」、故に「有限」、故に「数えられる云々」。しかし、ボダンはさらに論を進め、これら肉体から分離した魂、すなわち霊、天使、悪魔、そして同様に死んだ人間の魂が、もし身体をもっているとするならば（ここがボダンが一番力を入れて論じている点であるが）、何らかの形で有して、しかも太陽や月のように正円をしている、というのもこれが最も完全な形であるから、とする。「粗雑さもなく、角もなく、よじれたりねじれたりもなく、突出したところもなく、完全な身体の中でも最も完璧である」故に、あらゆる霊は身体をもつ、しかも正しい形、円の形でもつと彼は結論する。その他にも、霊は空気の身体をいかなる形でも意のままに身に纏うことができる。しかも望むがままの形となり、動きは極めて速く、瞬時に何マイルも通り抜け、自らと同様、他者の身体をも好きなように変え、驚くべき速さで場所から場所へと動かすことができる。（天使がハバククをダニエルに変え、助祭フィリップが宦官に洗礼を施すや霊によって連れ去られたように、ピユタゴラスとアポロニウスは同様の多くの行為で自らをも他者をも移動させた）。霊は城を空中に出現させることもでき、宮殿、軍隊、亡霊、奇怪な兆候やその他の不可思議なものを眼前に現したり、臭いや香りを起こしたりして、あらゆる感覚を欺くことができる。（この点についてほとんどの作家達が、もっともなこととして信じている）。霊は未来の出来事を予言し、不思議な奇跡をあれこれ為すことができる。このようにボダンは結論している

のである。ユノーの肖像がカミルスに、フォルトゥーナの彫像がローマ人の女達に語った等、同種の話は多々ある。ザンキ、ボダン、スポンダヌス等々は、霊が真の変身をもたらすとの意見である。実際、ネブカドネザルが獣に、ロトの妻が塩の柱に、またキルケーの呪文によってオデュッセウスの仲間達が豚や犬に変えられたように。魔女が呪文で猫や犬、兎、鳥などに変身するように、他と同様自らをも変えるのである。ストロツィ・キコグナは『魔術大全』3巻4、5章で多くの例を挙げているが、そこでの彼の議論はアウグスティヌスの『神の国』18巻での議論と同様、それらの例を論破している。霊は自ら望む時に、望む形で、望む人に姿を現すことができるとプセルスは主張し、「尤も私はそういったものを見たこともなく、見たいと望みもしないが」と述べている。ときには男もしくは女との肉体結合を為す、とも主張する、(このことについては他の箇所ですらに広範に論証する)。多くの者は、霊が眼に見えるなどとは信じようとはしない。霊を見たと言い、誓い、頑なに固執する者がいたとすれば、たとえその者が賢明で明敏、思慮深く博学であったとしても、腰抜けの阿呆、憂鬱症の間抜け、知力薄弱な奴、夢想家、病い持ちで気違いと思われ、蔑まれ、嘲笑される。だが、皆から信頼を得ているマルクスでさえ、しばしば見たことがあるとプセルスに述べている。またフランス人ジャック・ゴオリイは『パラケルスス「長命について」1巻註解』8章で、プラトニスト達の例を引いて、大気は、空に雪の降るごとく、霊で溢れていて、それらは眼に見え得るとし、その上、「もし輝く太陽のもと、瞬きすることなくじっと空を見つめていたなら」等、霊を見る方法を書き留めている。さらに彼は、その方法をいくつか試してみたが、プラトニスト達の言うことは真実だったと言う。パラケルススも、何度か見、言葉も交わしたと言い、アレクサンドロ・ダレッサンドロも同様に、「かつては疑っていたが、実際に見た」と言っている。ラーヴァータは『霊について』1部2章および2部11章で「自ら見たことがないという理由で」それを否定する者は多いと言うが、この著全体で、特に1部19章での概観によれば、霊はしばしば見聞きされ、人間と親しく交わったりもする。またルイス・ヴィヴェスが断言するように、夥しい記録、歴史、証拠によれば、このようなことはあらゆる時代、時、場所で起こり、さらに旅人にも起こる。西インドと我らの地、北方の地では「野や町で霊を眼にすること、また霊が禁止したり命令したりするのを耳にすることは、極めてよくあることである等々」。ヒエロニムスは『パウロ伝』で、バジルは『説教集』40、ニケフォロス、エウスビオス、ソクラテス、ソゾメヌス、またジャン＝ジャック・ボワサールは『霊の出現』の論で、ピエール・ル・ロワイエは『霊について』で、ヴァイエルはその著1巻で、霊の出現についての数知れないほどの例を挙げていて、さらに深い疑いをもつ者が読んでも充分満足するであろう。だから私はここで例をひとつだけ手短かに述べることにしよう。ドイツのさる貴族が大使としてスウェーデン王に遣わされ(その者の名、時、状況については私が典拠としたボワサールを参照していただきたい)、仕事を終えた後、人と話をしたり雑用をやってくれると言われる使い魔を見ようとりヴォニアに渡航した。霊はいろいろしてみせたが、その中で、ある霊が彼に、妻が何処で、どの部屋で、どんな衣服を着て、何をしているかを語り、しかも彼女からの指輪を持ってきていた。彼の帰還に際し、皆が驚いたことに、その話が本物であるとわかった。そういうわけで、

彼はそれまでは疑っていた霊の出現を、それ以降は信じるようになった。カルダーノは『靈妙さについて』19巻で、父親ファキウス・カルダーノについて述べている。1491年8月13日、その父がいつもの儀式の後七人の悪霊を呼び出したが、彼によれば、その悪霊はギリシア人のような外観で、四十歳ぐらい、赤ら顔のもいれば蒼白いのもいた。父はいくつもの問いかけをし、霊は速やかに答えた。自分達が空気の霊であること、人間同様に生き、死ぬこと、とはいえ人間よりははるかに長く（七、八百年）生きること、尊厳においてわれわれが雌馬より秀でていくごとく、人間よりはるかに秀でていること、さらに自分達の上位にいる者達は自分達よりずっと優れていることなどを答えたのだ。その上、霊は我らの支配者でもあり、看守でもあるが、このことについては、かつてプラトンが『クリティアス』で、互いに支配関係にあると述べていた。丁度人間が人間を支配するように、霊は霊を支配する。我々が馬番や牛番、最も低い地位なら家畜番に担わせているような役割は、下位の霊が担う。そして我々が霊の本質や役割を理解できないのは、馬が人の本質や役割を理解できないのと同じである。霊はあらゆることを知ってはいるが、それを人に知らしめるわけではない。我々が馬を支配するように、霊は我々を支配し、権勢を振るう。我らのうち最上の王達や、最も寛容な精神の持ち主さえも、最も低位の霊とは比較にもならない。ときには人を教え、技を伝え、報い、慈しみ、またときには脅し、罰して、人に畏怖の念を抱かせる（それを彼らは当然だと考える）、何よりも人に尊敬されることを欲するのだ（とヨウスト・リップスは『ストア派哲学』で言う）。同じこの作家カルダーノは『ヒュペルケン』で、ストア派の理論から、こういった守護神（とリップスは称するが）には、犬と同じように、人と一緒にいることを望み、とても愛すべきで、人間と親しくするものもあり、また蛇のように人を厭い、全く意に介しないものもある、とする。これはまた、フォン・ハイデンベルクが「鬼火とか月下のもの」と呼ぶもので、「決して低い地に降りてくることもなく、地上のものと交わることもほとんどない」。カルダーノはさらに、「概して言うところには、人が最も卑しい蛆虫を凌ぐごとく価値という点で人を凌ぐ」、尤も中には「王侯の宮廷での身分の低い下男のように、価値において自らと同位のものより劣るものもいる、あるいはさらに人間に劣るものもいる、理性的被造物たる人間でも墮落した卑しい者が野獣に劣ることもあるように」と言う。

霊が死すべき存在であることについては、カルダーノやカペラ等のこういった例証以外にも、他の多くの神学者や哲学者が「全ての霊は長生きはしても死ぬ」と考えている。プラトニストやラビ、テュロスのポリフィリヤブルタルコスも同意見で、「大いなる神パンは死んだ」と言ったタムスの話や、またアポロンが大蛇ピュトンを殺したという話等によってもわかる。聖ヒエロニムスは隠者パウロ伝で、霊が荒野で聖アントニウスに顕現して同じような話を語りかけたことを伝える。我々が近年の作家達の中でもバラケルススは、霊が他の生き物と同じく死すべき存在で、生きて死ぬ、と頑なに主張する。ゾジムスはその著2巻でさらに、霊と共に宗教や政治も死に、変わりもすると付言する。ローマの神々はコンスタンティヌス帝により排斥され、それと共に「ローマ帝国の威厳も幸運も衰微し潰えた」と彼は言う。ミニシウスの著において、かの異教

徒が、ユダヤ人がローマ人に打ち負かされたとき、ユダヤの神もローマの神の虜になったとかつて自慢げに言い立て、さらにラブシャケがイスラエルの民に、どの神もアッシリアの手から彼らを救いはしなかったと、言ったのと同様の意見である。しかしその力、身体を有すること、死すべき存在であること、形をとること、物体を移動させること、肉体の結合といった異説は、ザンキ4巻10章、ベレリウスの註解、トスタード・リベロ『創世記6章についての問題』、トマス・アクィナス、聖アウグスティヌス、ヴァイエル、トマス・リーブラー、デルリオ2部2巻29問、セバスチャン・ミシュエリ2章「霊について」、レノルズ博士『講義』47によってすっかり否定されている。霊は人の目を欺くかもしれないが、ほんとうは身体をもっておらず、ほんとうは変身することもない。キコグナが十分に証明するように、それらは幻影や騙りの変身にすぎず（『魔術大全』4巻4章）、『スイダス』でのパセテの銀貨の話、パルナツソス山に住み、騙しや盗みによって多くの宝を手に入れた、メリクリウスの息子アウトリュコスの話のようなものである。アウトリュコスの父メリクリウスは富を息子に残せなかった故に、資産を手に入れるための緻密な騙りを教えた。たとえば人間の家畜を追い立てて、もし誰かが追ってきたらその家畜を好きな形に変えるというような騙りを。そしてアウトリュコスはたいそうな金持ちになった。この騙りで莫大な戦利品を手に入れたのだ。これも他の事例と同じぐらい真実である。だがもっと全般的には、トマスやデュラン、その他の人達は、霊が人間をはるかに超えた理解力を有し、おそらく多くのことを推測することも、予言することもできると認めている。また霊が大抵の病を惹き起こしたり治したりも、人間の感覚を騙したりもでき、あらゆる技芸、学問にすぐれた技をもち、もっとも無知な悪魔ですらあらゆる分野において人間よりもよく知っている、とキコグナは他の著作家を引用して主張する。霊は菓草、植物、石、鉱物等、またあらゆる被造物、鳥、獣、四元素、星、惑星の効用を知り、それを適切に活用し、良しと思うところに使い、彗星の原因をよく知る等々である。（アウグスティヌスが言うように）「霊は色彩に適応し、形に適合し、音に付着し、臭いに滑り込み、味に入り込む、こんな風にして悪霊はあらゆる感覚を欺き、知力をすら欺く」。それらは空中で不思議な変化を生じさせ、最も驚くべき効果としては、軍隊を打ち破ったり、勝利をもたらしたり、援けたり、促進したり、傷つけたり、邪魔したり、人間の試みや為そうとすることを、（神の許しを得て）自分の良いと思う方向に変えたりすることができる。カール大帝がライン、ドナウ川間に運河を造ろうと考え、人夫達の昼間の仕事振りを見ようとしたとき、これらの霊が夜のうちに飛び降りて、うまく王に企てを止めさせようとした。そのようなことを霊は為し得るのだ。しかし、ボダンが『自然劇場』4巻で、（マキシムスともプラトニスト達とも考えを同じくして）霊は人間の心の中の秘密、あるいは人間の考えていることがわかると考えている点は、大きな間違いである。ボダンの根拠は薄弱で、ザンキ4巻9章、ヒエロニムス『マタイによる福音書註解』2巻「15章について」、アタナシウス『問題集』27「王アンティオクスに」などによってすっかり論破されているのである。

善き霊、悪しき霊の序列については、プラトニスト達が述べているが全く間違っていて、民間



の宗教の「善き守護神」また「悪しき守護神」の考え方もその誤りを正されるべきである。これら異教の作家達も、この点については自分達の間では意見の一致を見ていず、ダンディーニも「悪しき霊の存在いかにについては、彼らは合意していない」と注釈している。全ての霊が人間にとって良いか悪いかのいずれかであると、誤って考える者がいて、それはまるで牛や馬でもできそうな議論である。肉屋は殺すから敵で、牧者は餌をくれるから味方、猟師は獲物を捕獲し殺しもするので肉屋同様獲物からは嫌われ、また魚は漁師を愛せるわけがない云々。それでもイアンブリコス、プセルス、プルタルコスやほとんどのプラトニストは悪しき霊を認め、「それらの危害を及ぼす行為に気をつけなければならない、なぜならそれらは人間の敵だからである」とする。プラトンは悪霊がユピテルと争って地獄に落とされたのだと、エジプトで知った。アプレイウス、クセノポン、プラトンのソクラテスの霊についての議論は就中馬鹿げている。プロティノスが自身の霊について「霊ではなく神」とするのも、ポルフィリが霊だと結論しているものも、もし捧げものを怠れば怒るというのも、いやそれどころではなく、人の魂を食らうというのも馬鹿げている。カルダーノの『ヒュベルケン』での議論もまた然り、曰く、「四元素は植物の、植物は動物の、動物は人間の、そして人間は他の存在物の食物である。他の存在物といっても神ではない、神の本質は我々人間の本質からはるかに離れているから。故に霊の食物ということである」。我々があらゆる時代、国において幾多の戦いをしていたということは、霊のために祝宴を用意し、ただそれらを喜ばせるためだったというのもまた愚かな考えで、先述のごとく、霊が不快になると苛立ち焦れて、(我々人間が獣の身体を食べると同様に、霊は獣の魂を食べるのであるから)、我々にあまたの疫病を送り込み、一方、喜べば多くの益をもたらしてくれるとするのも同様である。このような考えは、その他の考えと同じく空虚なもので、アウグスティヌス『神の国』9巻8章やエウズビオス『福音への備え』4巻6章などで論断されている。しかしまたディオニシウスが九種の天使を挙げたように、我々がスコラ学者や神学者は九種の悪しき霊を挙げている。第一階位には、あの異教の偽神の数々、以前はそれぞれ偶像として崇められデルポイなどで神託を授けていた。その長はベーゼルバブ。二番目の階位は、デルポイのアポロンのような嘘つきと誤魔化すものの階位である。三番目は怒りの器、あらゆる悪戯を考え出すものの階位。プラトンでのテートゥスがその例である。イザヤはその階位を憤怒の器と呼ぶ。その長はベリアルである。四番目は悪意に満ちた復讐の悪魔で、その長はアシマダイ。五番目は騙るもの。魔術師、魔女などの属する階位、その長はサタンである。六番目は空気を腐敗させ、疫病、雷、火を惹き起こす空気に棲む悪魔。『黙示録』で語られ、エバソ人達に対してパウロは空気の王と呼んでいる。メレシなが長。七番目は破壊者、フーリアエの首領で、戦争、騒動、激動、反乱を惹き起こす。『黙示録』に記され、アバダンと呼ばれる。八番目は誹謗中傷する悪魔。ギリシア人達はディアボロス(Διάβολος)と呼び、人間を絶望に追い遣る。九番目はさまざまな種類の誘惑者で、その長はマモンである。プセルスは六種に分けたが、月より上のは考えていない。ヴァイエルは『悪魔の似非王国』において、ある古い書物から引いて、もっと多くの種に分け、さらに下位区分を設け、それぞれに名称や数、役割を与えている。ヨウスト・リップスの引用によると、

ガザのアエネーアスは、天使や霊、悪魔は至る所に満ちているとし、それらは月下界にも天上界にも存在していて、空氣的なものもあればエーテル的なものもあり、それについてはアウグスティヌスが『神の国』7巻6章でウァローから引用して「天上の悪魔と地上の空気の悪魔」としている。またある者は天上の神々と地上の半神とに分ける。ストア派によると、善く生きれば天上に昇るラレース、ヘーロース、守護神、それらが地に近く卑しく生きれば地を這うことになるが、それらはマネース、レムレス、ラミアである。彼らは、どこもかしこも霊や悪魔やその他のもので満ち溢れていて、そういったものがない場所などないとする。「天も、空気も、水も、地も、地下も、全て満ち溢れている」とガザのアエネーアスは言う。尤もアントニオ・ルスカはその著『地獄論』5巻7章で、霊を天上と地上の中間に限定しておこうとしているが、とはいえ彼らは霊はどこにでもいると考えているのである。天にも地にも、地上であれ地下であれ水にも、髪の毛の一筋ほどにも霊のいないところはない。空気には常に眼に見えない悪魔が溢れている、夏に空気中に虫が沢山いるといっても物の数ではない。このことをバラケルススは頑なに主張し、霊はみな各々の混沌原質をもっているとする。また無限の世界を想定し、そこにはそれぞれ独自の霊や神、天使、悪魔がいて、支配し、罰も与えたとする者もいる。

ある人達は個々の星がそれぞれひとつの世界と

言い得ると考え、我々のこの地球を暗い星と呼ぶ、

最も卑小な神が統べる星と。

トゥールーズのグレゴワールは、土星、木星、火星など七惑星の数に従って七種の天の霊すなわち天使を考える。それについてカルダーノは『靈妙さについて』20巻で議論し、これを「第一実体」と呼ぶ。フォン・ハイデンベルクは「オリンピアのダイモン、十二宮を司るもの」と称して、月より上にあつては善き天使、月下にあつては悪魔とし、それぞれの名称と役割を書き記している。ディオニシウスによると、国、人、役割などに応じて異なる霊たる天使がいて、人の周辺で事を為して多くの助力となるが、一言で言えば無数、空の星の数ほど多くのものがある。マルシリオ・フィチーニはプラトンに倣ったか、あるいは自らそう考えたかはわからぬが、この意見を支持しているようである。(あらゆる霊は自らより劣る霊を支配し、支配される霊はさらに下の霊を同様に支配し、全ての霊がいずれかの霊に従属することとなり、大地に最も近い霊が我々人間を支配する。その霊を我々は善悪二つに分け、我々を助けてくれるか傷つけるか、愛を礼讃するか憎悪を礼讃するかによって、神もしくは悪魔と呼ぶ)。この考えはプラトンに準じている可能性が高いが、というのもプラトンは「嘘をつくぐらいなら死んだ方がいいとした」ソクラテスに全面的に依拠して、ソクラテスの権威のみによって霊を九種に分けたからである。ソクラテスは同様にこの考えをピュタゴラスから採り、ピュタゴラスはトリスメギストゥスから、トリスメギストゥスはゾロアスターから採った。それによると1. 神、2. アイデア、3. 智天使、4. 大天使、5. 天使、6. 悪魔、7. ヘーロース、8. 君天使、9. 王天使で、これらには神々のよう

に明らかに善きものもあり、また悪しきものもあり、ヘーロースやダイモンなどどちらでもない半人半神もある。これらは人を支配し、守護神と呼ばれた。あるいはプロクロスやイアンプリコスが言うように、神と人との間に位置する君天使や王天使がいて、王や国に命を下したり支配したりするが、それらはおそらくいろいろな天球に住んでいると思われる。天球が高くなればなるほど、それに従ってより優れた霊がそこに住むからである。それはガリレオ・ガリレイ（そしてケプラーも）の『星界の報告』での論点で、彼はそこで土星や木星の軌道天に住まうものについて述べ、またティコ・ブラーエも一通の手紙の中で、何らかの意味でそれに触れ、灰めかしている。このことをザンキが4巻3章で、ピエトロ・マルティーレが『サムエル記註解』28で論破したが、それは正しい。

というわけでこれらの人達によれば、天の霊の数は無限に違いない。何故なら、もし石が恒星天すなわち第八天球から落ちて、毎時百マイルで進んだとしても、天と地球の間の途方もない距離故に、大地に到着するまでに六十五年かそれ以上かかるであろうし、その距離が170,000,803マイルという、現代の数学者の言葉が本当なら、その上にマギーニが付け加えた天球は、水晶のごとくであれ、水のごとくであれ、おそらくさらに多くの霊を保有するであろうから、どれくらいの霊がそこにはいることになるのだろうか。こういった議論があるにもかかわらず、トマスやアルベルトゥス、それにほとんどの者が悪魔より天使のほうがずっと沢山いると考える。

だが多かろうと少なかろうと、我々の上方にあるものは我々にとっては無である。カペラの考えは確かに馬鹿げてみえるが、「天の悪魔は人間の事柄には関心を抱かない」。それらは我々には構わず、我々の行動に関わりもせず、我々を捜しもしない。あの天の霊には治めるべき別の世界があり、為すべき別の仕事がある。我々はこれら月下の霊すなわち悪魔についてのみ手短かに述べればよいのであって、他のものについては現代の神学者が、悪魔には星や天に及ぼす力はない、と規定している。「その呪文で月を天から引き下ろすことができる云々」とか「川の流れを止めること、星を逆行させること」ができるなどというのは詩的な創作で、ホラティウスのカニディーダもしているが、これらは全て偽りである。霊は最後の審判の日まで、月下の世界に閉じ込められて、四元素を超えては働きかけることもできず、神が許した範囲のことしかできない。というわけでこれら月下の悪魔については、それぞれの場所や役割によって分類する人もいるが、プセルスは六種に分けて「火の」、「空気の」、「土の」、「水の」、「地下の」悪魔、そしてそれ以外にフェアリー、サテュロス、ニンフなどをおく。

火の霊、悪霊は共に燃える星々や流星－鬼火－によって事を為す。これらはしばしば人々を「川の流れへ、崖へと」誘い、「旅人達がそうならぬようにと欲するなら、はっきりと神の名を呼びわり、地に顔をすりつけて礼讃し、祖先から受け継いだ魔よけのお護りを携帯せねばならぬ」などとボダンが『自然劇場』2巻211で述べている。同様にエウセビウスがクセノパネスに依拠し

て『哲学者への反論』48章で述べているとおり、それらは太陽や月、ときには星々の姿をとり、「船で一番高いところに姿を現し」船のマストに腰かけて、デルスクーロイと呼ばれたり、あるいは「得体の知れない動きをしながら飛ぶ」小さな雲となって現れる。カルダーノによれば、姿を見せることはないが、何らかの害悪が人間に及ぶ前兆をなす。また一方善を予兆し、海戦においてそれらがついた側に勝利をもたらすと言う者もいる。たいてい聖エルモスの火と呼ばれ、しかも海の嵐の後で現れることが多いと言われる。ポーランドの公爵ラジヴィツツルは聖ゲルマヌス星とこの幻影を呼び、さらに1582年、アレキサンドリアからロードス島に向かう途中、嵐にあったときに同じものを見たと言う。我々のまわりの記述にはありとあらゆる種類のそのような幻影が満ち溢れている。その住処についてはアイスランドのヘクラ山、シシリー島のエトナ山、またはレペラ山、ヴェスヴィオス山などを挙げる者もいる。かつてこれらの悪霊は、火占い(Πυρομαντεία)などの迷信で崇拜されていた。

空気の霊、悪霊は空気の大部分を見張る者で、多くの嵐、雷鳴、稲光を生じ、オークの木を引き裂き、尖塔や家々を燃やし、人や獣を撃ち、リウイウスの時代にあったというように、石を降らせ、羊毛や蛙などを降らせる。さらにトルコ軍が進軍する前のウィーンで一度、またローマでは何度もみられたように、空気中に軍隊や剣を出現させたり、奇妙な音を響かせたりする。これらはシェレルツの『亡霊の書』1章1部、ラファータの『亡霊』1部17章、老ローマ人ユリウス・オブセクエンスの驚異の書のローマ建設紀元505年の項に述べられている。マキャベリは多くの例を挙げ、ヨセフスは『ユダヤの民の戦い』で、エルサレム崩壊以前の例について述べる。グイヨーム・ポステルはその著『天体の調和』7章で、霊や悪霊の存在を信じようとしなない人達を説得するために、これらすべての例を決定的な論拠(確かにそういった論拠となるのだが)として用いる。空気の霊は、突然つむじ風を起こしたり、嵐をもたらしたりする。そういったことについて当世の気象学者は総じて自然的原因によるとするが、私はポダンと同意見である。ポダンは『自然劇場』2巻で、かかる現象はかの空気の悪霊によって、それぞれの領域で惹き起こされると言う。というのもリチャード・アーजेンティンによると「それらは嵐のときに姿を現す」だけでなく、絶望に陥った者が首を吊ったり、入水したりして自殺するときも現れ、コルンマンが『死者の驚異』7部76章「舞踏する者」で言うように、罪人の死に際の狂喜乱舞にも現れるからである。これらの霊は空気を腐敗し、疫病や病、難破、火事、洪水を来す。イタリアのドラコン山における顕著な例をジョヴァンニ・ポンターノが挙げている。(もし、サクソ・グラマトイクスやオロフ・マンソン、ダミアン・ド・ゴイスの言っていることを信じるなら)これほどよく知られたものはない。ラップランドやリトアニア、その他スカンディナヴィア全土では男女の魔術師が船乗り風に送り、嵐を起こしたりすると言われるが、ヴェネツィアのマルコ・ポーロはタタール族について同様のことを述べている。この種の悪霊は犠牲を好む(とポルフィリは言う)ので、世界中が畏れ、ローマ、ギリシア、エジプトではそれぞれに名前、偶像、犠牲を与えていた。現代でも暴君ぶりを発揮し、異教の者やインドの民を騙し、神として崇め奉らせるに至っている。(ト

リスメギストゥスが『アエスクラーピウス』で述べているように) 異教徒にとってのこれらの神は悪霊で、トリスメギストゥス自身魔術的呪文で悪霊を顕現させることができたという。今では、それらは異教徒がしたように「教皇派によって聖人という名のもと崇められている」と、ピクトルは言う。カルダーノの考え方では、それらは魔女との情交を大いに好み、インキュバスやサキュバスに変身し、触れば非常に冷たく、魔術師につき従う。カルダーノの父親にはその霊の一つ、空気の霊が二十八年間も取り憑いていた(とカルダーノは恥じることなく述べている)。アグリッパの犬の首輪には悪霊が取り憑いたというが、パラケルスス(でなければエラストゥスが間違っている)は霊を自分の剣の中に打ち込んでいたらしいし、指輪にして身につけている者もいたらしい等々。かつてヤンネとヤンブレは空気の霊の助けを借りて多くの事を為した。その他シモン・マグス、キノプス、ティアナのアポロニウス、イアンプリコスなど、最近ではフォン・ハイデンベルクもそうである。彼はマキシミアン帝が妻の死後首の回りに疣がしっかりとできているのを見たとして記している。デルリオのその著2巻には、空気の霊の業の例が数多くあり、キコグナの3巻6章やヴァイエル『悪霊の欺き』、ボワサール『魔術師と妖術師』においても然りである。

水の悪霊はナーイアスとか水の精とか呼ばれるもので、ゆえに水や川に精通している。それらの棲む水は混沌とパラケルススは考える。フェアリーと呼び、ハブンディアが女王だという者もいる。洪水を惹き起こし、難破を招くことも多い。また男達を惑わし、さ迷わせるが、サキュバスその他のものとして、多くは女の姿で現れる、とフォン・ハイデンベルクは言う。パラケルススも、人間の世界に生き、人間の男と結婚して何年か暮らしたが、嫌になって捨てたという話をいくつか挙げている。例えばエゲリアと彼女と暮らしたヌマの話や、ディアナ、ケレスの話はよく知られている。あるいは狩りに出かけて仲間とはぐれ、水の精に出会ってもてなされたスウェーデン王ホテルスの話をオロフ・マンソンは長々と記している。ヘクター・ボエティウスは、森をさ迷っていて三人の見慣れぬ女から運命を予言された二人のスコットランド王、マクベスとバンクォーの話語っている。この魔女達に人々はかつて、水占い(ὕδρομαντεία)で犠牲を捧げたものであった。

土の悪霊はラーレース、ゲニウス、ファウヌス、サテュルス、木の精、フォリオット、フェアリー、ロビン・グッドフェロー、トロル等々で、人間とよく生活の場を共にし、それゆえによく害も為す。その昔、異教の民を畏怖させ、数多の偶像や寺院を建てさせたのは、これら土の霊のみだと言われもする。この範疇に入るものとしては、ペリシテ人のダゴン、バビロニア人のバベル、シドン人のアスタルテ、サマリア人のパール、エジプト人のイシスとオシリスなどがある。フェアリーをこのなかに入れる人もいる。フェアリーが昔は、家を掃除したり、きれいな水を汲んでくれたり、食べ物を運んでくれたりなどすることで、大いに迷信をもって崇められ、それゆえ、人々はつねられることもなく、靴の中にお金を見つけ、仕事もうまくいくと信じられていた。ラファータやフォン・ハイデンベルクによるとフェアリーはヒースの野や草地で舞踏をし、さらにオロフ・

マンソンが述べるように、緑のサークルを残す。このサークルは平原によく見られるが、流星が落ちた跡だと考える者もいれば、自然の気まぐれで、その部分だけ土地が肥えているからだとする者もある。またフェアリーは老婆や子供に目撃されることもある。ヘロニモ・パウは、スペインのバルセロナの町についての記述で、この町の付近や、泉や丘で、土の霊がいかによく目にされたかを述べている。またフォン・ハイデンベルクは「時に、彼らより知力の劣る人間を山中の隠れ家に連れていき、不思議、鐘の音、幻影を見せたり、聞かせたりして驚かせた」と言う。ジェラルド・ドゥ・バリは、そうして惑わされたウェールズの修道士の例を挙げている。パラケルススは、小さい上着を着た土の霊がよく歩いているドイツの場所をいくつも挙げていて、中には背丈が二フィートのものもいるという。彼らの仲間にはホブゴブリンとかロビン・グッドフェローと呼ばれるもっと大きいものもいて、迷信深かった時代には、一皿のミルクを置いておくと小麦を挽いてくれたり、薪を切ったりと、骨折り仕事を何でもしてくれた。彼らは古くには、アイオリスの島リュプラで古くなった鉄器を直し、よく見かけられもし、話にもほった。トゥールーズのグレゴワールはこれをトルロとかゲテルスとか呼び、彼の時代にはフランスで至るところでよく見かけたという。デトマルス・ブレフケニウスはアイスランドの叙述で、ほとんどの家庭にも、そのような使い魔がいると、確かな情報として報告している。フェリクス・ヘンメルリはその『霊の信憑性』において、これらトルロやテルキーネスはノルウェーにはよくいて、「雑用をこなしているのがよく見られる」と明言している。例えば、水を汲み上げたり（ヴァイエルもその著1巻22章で述べている）、肉の下ごしらえをしたり、といったようなことを。また別種のものとしては、しばしば廃屋にいるもので、イタリア人はフォリオットと呼び、たいてい害のないものである。カルダーノ曰く「夜に奇妙な音を立て、哀れな声で吠えたかとおもうとまた笑い、突如光を発したり、石を飛ばしたりもする。鎖をガチャガチャいわせたり、人を揺さぶったり、ドアを開閉したり、皿や椅子や櫃を飛ばしたり、またときには、兎、烏、黒犬などの姿で現れたりもする」。こういったことについては、イエズス会士ペトルス・ティーラエウスの論攷『不穏な場所』1部1、4章を参照すべし。彼はそれらを悪魔か、復讐を求めている地獄墮ちの亡者の魂、はたまた安らぎを求めて煉獄から出てきた魂と考えている。その例についてはジグムント・シュレルツの『亡霊の書』1部1章を精読すべし。彼が言うにはルターから引いているのだが、この例は多い。哲学者アテナドロスがアテネに借りた、悪霊を恐れて誰も住もうとしない家のことを小プリニウスが記憶に留めている。アウグスティヌスは『神の国』22巻8章で、彼らの町ヒッポスの近くズベダにある護民官ヘスペリウスの家が悪霊に取り憑かれ、「彼の動物や奴隷共々」大いに彼が悩まされたことについて述べている。ニデル『蟻』の5巻12、13章等でも、この種の例を多々読むことができる。これらを、『イザヤ書』13章21節にあるように、ジイム (Ziim) とかオキム (Ochim) と呼んでよいものかどうか解らない。こうした例をもっと知りたい人は、前述のシュレルツの『亡霊の書』1巻4章が夥しい例を挙げているので、それを見ても良からう。この種の悪霊はよく人間に現れ、脅かして気を触れさせたりもし、ときには白昼、ときには夜中に歩き回る。死者の霊を装うこともあり、例えば、スエトニウスによれば、カリギュラの

霊が、埋葬されたラヴィニアの庭園（そこはよく霊が出没したのだが）や亡くなった家を歩くのが目にされ、「家が燃えてなくなってしまうまで、この恐怖のない夜は一夜とてなかった」。アイスランドのヘクラ山では、死者の魂を真似て、幽霊が始終歩くと、ジョヴァンニ・アナーニアが『霊の本性』3巻で述べ、オラウスがその書の2巻2章で、ノエル・タイユピエが『霊の出現についての書』、コルンマンが『死者の驚異』1部44章で、こういった光景はしばしば見られると言う。ラファータ1巻19章によれば「修道院や教会墓地の辺りで」、ティーラエウスによれば「沼地で、大きな建物で、人気なきところで、また人殺しがあったと知られる所で」さらに「重罪が犯されたり、不信心な者や貧しい人を虐げる者、邪悪さで名の通った者が住んだ」所に見られるという。これらの霊は、こつこつ音を立てたり、呻ったりといった様々な合図で人の死を予言したりすることもしばしばである。リチャード・アーゼンティンは『霊の幻影』18章で、フィチーノその他に依拠してこの予言を善き天使に帰しているが、ローマのラテラノ大聖堂で教皇達の死がシルヴェステル二世の墓で預言されたように、予言はしばしば王の死に対してなされる。スウェーデン王国フィンランドのルベス・ノウァ城の近くに湖があり、城主が逝去する前に一人の亡霊がアリーオンの姿で竖琴を持ってその湖に現れ、妙なる音楽を奏でたという。チェシャーの樹の幹もその例で、その家の主の死の前兆となった（と言われる）。またコーンウォールのランタドラン庭園のオークも同様に予言を示す。ヨーロッパの多くの家系がそのような預言によって最後の時を心に刻み、また多くの人々が、（パラケルススを信ずるなら）鶏、鳥、梟など様々な姿の使い魔によってそのときを予告された（こういった使い魔達は、病人の部屋の辺りをしばしば飛び回るのだという）。バリチェッリが推測するように、「それらの鳥が死に逝く人の忌まわしさを感じ取り」、死体の臭いを嗅ぎ分けて「それ故、瀕死の人の家の屋根の上で鳴いた」。（バーナーディノ・デ・バステイが考えるように）この世で悪しき生き方をする者を脅すために、鳥とかそのような動物の姿で現れることを、神が悪霊に許すからである。プルタルコスが言うには、キケロが死ぬ少し前、「鳥が彼の周りで喧しく鳴き、彼の頭の下から枕を抜き取ったという。ロベール・ガガンは『フランク王国史』8巻で、1345年の領主ジョアン・ドゥ・モンフォールの死に際して次のような驚異的な話を語っている。すなわち「瀕死の人の家には数多の鳥が留まっていて、ガリア中にどれだけいるのか解らないくらいだった」。そういった驚異は様々な著作によく記されている。例えば、前述のラファータや、ティーラエウスの『不穏な場所』3巻58章とか、ピクトル、デルリオ、キコグナの3巻9章などでさらなる例を見ればよからう。巫術師達はそれらと関わり、好きなように霊界から呼び出し、また戻している。また同様に、ミールがアンビュローネースと呼ぶ者達は、ヒースの生い茂った荒地を夜中に歩き回り、（ラファータが言うには）「人々を脇道に逸らさせ、夜中さ迷わせ、時として元には戻れなくさせる」。これらには場所により、それぞれ名がつけられているが、一般的にはバックと呼ぶ。ヴェネツィアのマルコ・ポーロの旅行記にあるように、アジアのゴビ砂漠では、そのような霊の幻影が歩き回るのが見られる。もし連れの者からはぐれるようなことがあれば、これらの悪霊が連れの声を騙ってその人の名を呼び、騙すのである。ヘロニモ・パウはスペインの丘についての著で、カンタブリアの高い山について、

かかる霊が見られると言い、ラファータやキコグナもこの種の霊や歩き回る悪霊の様々な例を挙げている。それらは公道に座っていて、人を転ばせたり、馬に乗っているときなら、馬を躓かせたり驚かせたりすることもある（もし、「罪なく霊と言葉を交わすべく神から恩寵を与えられた」という聖職者ケテルスについての、ニューバーグのウィリアムの記述を信ずるなら）。そして躓いたという理由で馬を呪ったり拍車をかけたりすれば、霊達は心の底から喜ぶであろう、その他多くの愉快的悪戯の場合も同様である。

地下の悪霊はその他の霊と同じようによくあるもので、同じように悪戯を為す。オロフ・マンソンは6巻19章で大小さまざま六例を挙げている。ミュンスター曰く、これらは鉱脈のある辺りによく見られ、あるものは有害で、あるものはまた無害。鉱夫達は、多くの場所で、それを見ると幸運、宝の証、鉱石の証と考える。ゲオルグ・パウエルはその著『地下の生き物』37章でゲテルスとコボルトと呼ぶ二つの特筆すべき霊を挙げ、どちらも「鉱夫のような服を来て、たいていその仕事を真似る」と言う。それらの仕事はすぐに見つからないように地中の宝を守ることであると、ピクトルやパラケルススは考え、「家のみならず、島や町を丸ごと飲み込んでしまう」恐ろしい地震を起こすのも往々にして彼らの仕業であると、キコグナはその著3巻11章で断言し、多くの例を挙げている。

最後のものは、地球の中心に住まい、永遠の断罪を受けた者達の魂に、最後の審判の日まで責め苦を与える霊である。それらの出口はシチリア島のエトナ山、ヒュパラ山、アイスランドのヘクラ山や、ヴェスヴィオス山、フエゴ島などと考える者もいる。こういう場所では金切り声や、恐ろしい叫び声が至る所で常に聞かれ、よく知られる死者の幽霊、亡霊やゴブリンも見られるからである。

悪霊たちはかく席卷し、しかもあれこれ姿を変える。その場所を空中と考える者もいるが、未だ定まることなく、「食らう獲物を絶えず捜し求めるライオンのように」（『ペトロへの第一の手紙』5章）、地中、海、陸、空中とその居場所を変える。罪なきものは、我らと月との間のいかなる場所にも、また罪深きものは、アウグスティヌスが『神の国』8巻22章、14巻3章で「それらはこの世の終焉まで牢獄のごとくここに閉じこめられ、さらに恐ろしげな所へと放り込まれる」と述べているように、地獄を席卷する。それらは何処にいようと、（ラクタンティウスが考えるには）人間の墮落に慰めを得るので、怒って自分と同じ地獄に墮ちるようにと画策する。「人間の悲惨、惨禍、破滅は悪霊の饗宴の馳走」だからである。悪霊は多くの誘惑やさまざまな手段で我々の魂を捕らえようとする。アウグスティヌス曰く、「自己欺瞞に陥り、他を騙そうとする故に」虚偽の首領であり、あらゆる邪悪の首謀者、イヴ、カイン、ソドム、ゴモラに対して行ったのと同じように、全世界に対して悪を為すだろう。ある時には強欲、深酒、快楽、傲慢などで誘惑し、謬らせ、落胆させ、救い、殺し、守り、人が馬に乗るように上に乗るかか。悪霊は我々



の破滅についてよく調べていて、広く我々の墮落を求めている。しかも多くの場合、古のアポロン、アイスクラーピウス、イシスが、疫病を逸らせたり、戦争で力を貸したり、偽りの幸福を醸したりしたように、人間に善を為す振りをする。神の姿を装い、アウグスティヌスが『神の国』10巻6章で言うように、「病める者に健康を、盲いた者に光ある視力を取り戻したりし」、あれこれの病気を癒したりするが、「これほど不純なるものも、悪なるものも、人類に有害なるものはない」。それはサテルヌスやモレクが非道残虐にも人間の犠牲を求めることに見て取れる。そういった残虐な犠牲は、今なお、野蛮なインディアン達の中にあり、人に従わせるためのさまざまな騙りや欺き、偽りの神託、犠牲、断食や貧窮などの御幣担ぎの強要、異端、迷信、食事や時間の制限などが行われる。こういったことによって彼らは人間の魂を十字架にかけているのである。この件については宗教的憂鬱についての論叢で後に触れる。バーナードが言うように、「そのときまでしばらく、悪を働くのを許され」るが、その後「彼と仲間の天使達のために用意された」（『マタイ』25章）地獄の闇へと閉じこめられる。

霊の力がどれほどまでに及ぶかを定かにするのは難しいが、その影響、効力、作用について、古代の人々の考えをここ簡単に示しておこう。『クリティアス』でのプラトンと後に続く弟子達は、これらの霊や悪霊は「人間を支配し養うもの、我々が家畜に対するのと同じように、主人であり主である。神託や占いで地域や王国を支配する」と言う。その他、夢判断、応報、懲罰、預言、靈感、犠牲、宗教的迷信など、さまざまな形で支配するのだが、それは種々さまざまな霊が存在するからである。トゥキュディデス、リウィウス、ディオニシウス・ハリカルナッセウス等の叙述が示すように、それらは「折々我らの傍に立って、見張り、裁定するなどして」、戦争、疫病、平和、病気、健康、飢饉、豊穡をもたらす。彼らの著は目を見張るような霊達の戦略に満ち溢れていたもので、ローマやギリシアの共和国は称讃や犠牲を捧げて神のごとく敬い崇拜した。要するに「人間への恐怖や驚異ほど、それらが望むものはない」、また他の書によれば「邪悪な霊がいかに強烈な熱意で人間を支配し神として崇拜されることを願っているかは、語り尽くせないほどである」。フォン・ハイデンベルクはその著『七つの幸運』において、何を根拠に言っているのかわからないが、特定の地域の支配者となっているような天使達に名前を付与し、それぞれに権力を与えている。（キコグナにも引用されているが）ギリシアの天使にはアスクレピアデス、ユダヤの天使にはラビ・アキバ、アラビアの天使にはアブラハム・アヴェネツァラとラビ・アツァリエル、といった具合である。さらに、それらは我々の支配者であるのみならず、「同意するかしないかによって好意や敵意を醸し出す」。味方になるか敵になるかもまた然り、ユノーはトロイの大敵で、アポロンは良い味方、ユピテルはどちらでもない、「トロイの民にとってウェヌスは味方でパラスは敵だった」。我々にとって常に味方であるものもあれば、敵であるものもある。「虐げる神あれば助ける神あり」。宗教、政治、公的私的なもめごと、戦争がそれらによって招来され、人間が鶏、牛、犬、熊などが戦うのを見て楽しむように、おそらくそれらは人間が争うのを見て楽しんだのである。疫病も飢饉もそれらの意のままに、我々の幸も不幸も、その他個々の

振る舞い、(アントニオ・ルスカの5巻18章での主張に拠れば、人には誰でも生涯を通じてその人特有に付いている善き天使と悪しき天使がいて、イアンブリコスはそのをダイモンと称しているが、それ故に)昇進も、失職も、結婚も、死去も、報償も、懲罰も、それら霊次第である。またプロクルスならばすべての仕事も霊次第と言うだろう。「生成に与るものもあれば、仕事に与るものもある」。霊にはその役割に応じてラーレス、インディゲータス、プレスティテース等々それぞれ名前が与えられている。例えば、ギリシアを解放するためにフィリップ王と戦ったケローナの戦いで、アルカディア人達が欺いて振るまっていたので、後にまさに同じ場所で、「ギリシアの神が復讐者となって」(と我が著者は言う)、ローマ人のミテルスによって惨殺された。同様に、霊はもっと卑小なことで、善き守護神と悪しき守護神が我々に好意的か非好意的かによって諸事を惹き起こす。「サテルヌスを守護神とする者はユピテルを守護神とする者とは相容れない」。取るにたらないグナトのような輩、邪悪な太鼓持ちといった、卑しい者達が登用されて、思慮深い者、賢明な者、有徳の者、立派な者が蔑ろにされ、報いられないのは、彼らが支配する霊とそれに従属する守護霊とに関連しているからである。霊が人に対し心を傾けたり、好意を向けたりすると、その人も同様に栄える。また人が支配されたり打ち負かされたりするのも、リバオが考えるように、日々の軋轢や喧嘩において「守護霊が守護霊に身を委ね、服従する」からである。あらゆる個々の出来事はほとんど、この個人に係わる霊に関係しているとされる。さらに(パラケルススが付け加えて言うには)、霊は人間を導き、教え、鼓吹し、教示する。情報をくれる使い魔がいない人には、ヌマ、ソクラテス、その他カルダーノが『民間の預言の秘儀』128章で例証する多くの人たちほど、学芸や、行動、指揮において、名声を博した人はいない。「占星術師達は、神によって特別な恩寵で力を与えられ、天上の霊から教示を受け、学んだと主張している」のである。しかしこれは大いに誤まったパラドックス、愚かなくならない紛い物で、神学者や教会からは拒絶された。ただそれらが神の許しを得て我々に対して力を揮っているというのは真であり、我々は経験から、それらが畑や家畜、持ち物のみならず、身体や心を損なうことを知っている。1484年6月20日ザクセンのハーメルンでまだら服の笛吹の姿をした悪魔が百三十人の子供を連れ去り、二度と戻ってこなかった。人間が恐怖のあまり気が触れたり、シュレルツが1巻4章で例を示しているように杓として行方が知れなくなったり、その技によって著しく悩まされたりすることはよくある。プラトニストのプロティノスは14「反対派グノーシス主義者」で、悪霊や霊がこのような病を惹き起こし得ると考える者達を笑い軽蔑している。悪霊は身体には影響を与えるが、精神には与えないと考える者が多い。しかし経験から両方に作用しうると別の主張をする者もいる。テルトゥリアヌスも同意見で、著書の22章において「悪霊は病も健やかさももたらし得る」、しかも密かに、と述べている。タウレルスはさらに「悪霊は、我々には知覚することはできないが、秘密の毒で身体に作用し、こっそりと這い込んで、腑の機能を妨げることができる」と言う。リブシウスは「毒ある憂鬱は狂気をもたらす」と言い、同様に魂を苛むとする。霊的な身体をもつゆえに悪霊は人間の魂と格闘し、人がそのような傾向を呈したときには、カルダーノの言葉を使うと「声なき言葉と視覚なき光景とを」示し、嫉妬、欲情、怒

り等へと駆り立てる、とロジャーズは言う。

いかにしてそれを為すかは、ピエルマンがその弁論の中でボダンに反対してはっきり言明し、「悪霊はまず空想力に働きかけ、かつそれを強烈に動かすので理性が抗えなくなってしまう」のだと言う。ところでその空想力を動かすには体液を媒体とする。しかし多くの医者は、悪霊が心を変化させ、この狂気という病を生み出すと考えている。アヴィケンナが言うには、「**憂鬱は悪霊に由来すると考える医者がある**」。プセルスも同意見で、アラブ人ラーゼスも1巻9論攷、続篇で「この病は特に悪霊から生じ、しかも他に原因はない」と言う。アルコラーニは9巻本の16章、ラーゼス、アエリアーヌス・モンタルトゥスは著書9章、ダニエル・ゼンネルト1巻1部11章は、同様に悪霊がこの病を惹き起こし得ると確証している。体液を介在させずとも、憂鬱症患者達が予言したり、不可思議な言葉を発することが何度もあるというのがその理由だ。しかし、アヴィケンナになると、「もし**憂鬱が悪霊に由来するのだとしたら、悪魔が体液の配合を黒胆汁に変えているのであって、それゆえ憂鬱の直接原因は黒胆汁である**」。この考えをポンポナツィも詳しく論じて立証している。マントヴァのガルゲラントゥスは著名な医者で当時悪霊に憑かれて、あらゆる言葉を話すようになった女を、黒胆汁を瀉出することで治療した。この憂鬱の体液は**悪霊の浴場**と称されるのは、おそらくこのためである。機会を狙って体液を密かに探っている悪霊が、自らその体液に混じり込み、その体液を持った人間を絶望、怒り、狂気などへと追いやることは何度もある。テルトゥリアーヌスは次のように言明している、「**悪霊は悲惨な打撃を身体に、思いもよらない打撃を精神にをもたらす。そっと忍び込んで手足をねじ曲げたりもする**」等。またレメンスは「**悪霊は腐敗した体液や黒胆汁に混じり込む**」等、立証しようと努めている。さらにヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデは、「悪霊は微細で目には見えない霊なので、たやすく徐々に巧みに人間の身体に入り込み、腑に潜んで、健康を損ない、恐ろしい夢で魂を脅かし、怒りで心を震撼させる」と述べ、また別の箇所では、「これら不浄なる霊は、我々の身体に棲みつき、憂鬱の体液と混じり、いわば勝ち誇って新たな天国にいるがごとくに楽しむ」と言う。彼はこのように論じ、霊は、ミツバチが巣に出入りするように、我々の身体に出入りし、我々の気質が傾き、もっとも騙しやすいときを見て取ると、唆し、誘惑する。アグリッパとラファータはこの体液が悪霊を呼び寄せ、それゆえ極限まで活性化すると、得心している。だから全ての者の中で憂鬱気質の人間がもっとも悪霊の誘惑や幻想に引っかかりやすく、悪霊を楽しませることになる。また悪霊の側から言ってもそういう人間はもっとも影響を与えやすい。しかし取り憑かれたのか、魅入られたか、あるいはそれ以外のあり方なのか、私には決めかねる、極めて難しい問題である。イエズス会士のデルリオは3部6巻で、シュブレンガーと共著者は『**邪悪なものへの鉄槌**』で、イエズス会士ペトゥルス・ティラエウスは『**悪魔憑き、不穏な場所、夜の恐怖についての書**』で、ジロラモ・メンギは「**悪霊への鞭**」、またその種の他の教皇派の作家達は、**祓魔や降霊で取り憑き説を証明し、合目的に幾多の話を捏造してきたように思える**。たとえば、ある修道女がレタスを食べる前に、「**食前の祈りをしなかったか、十字を切らなかったか**」た

ちまち悪魔に取り憑かれたという。デュランは『神の恩顧の財宝番』6巻86章8番でボノーニアで、穢れを祓ってないザクロを食べたために二人の悪霊に取り憑かれた女中の話をしているが、後になってその娘が言うには、悪魔払いによって治ったという。というわけで我が国の教皇派は、悪霊が不敵にも侵入してこないようにと、始終十字を切り、穢れて忌まわしいからとあらゆる食べ物のお祓いをするが、ベラルミーノはそれを擁護している。そのような話は、教皇派の作家たちに数多く見いだされるが、彼らの主張を立証するのは彼らに任せておこう。ただ広く認められた医者のもからこの種のを二、三列举しよう。コルネリウス・ゲマは、2巻「自然の驚異」4章で、クーパーの娘カトリーヌ・ガルティエが1571年、摩訶不思議な感情と痙攣に襲われ、男が三人かかっても彼女を抑えられなかったと書いている。彼女は生きた鰻を吐き出し、ゲマはそれが一フィート半もあることを眼にし、自ら触れもした。その後、鰻は消え失せたが、彼女は二週間もの間、毎日二度、さまざまな色のむかつくものを二十四ポンドほども吐きだした。その後さらに、髪の毛の大きな固まり、木っ端、鳩の糞、羊皮紙、鷲鳥の糞、石炭、然る後に二ポンドもの鮮血、そしてまた石炭に石を吐き出し、そのいくつかには胡桃より大きい銘刻がついていたし、ガラスや真鍮などのはめ込まれていたものもあった。さらに発作のように笑ったり、泣いたり、恍惚となったりなどし、「私はそれを恐怖を抱いて見ていた」とゲマは書いている。医学ではいかんともし難く、宗教に委ねられたという。マルチェッロ・ドナーティは2巻1章『驚異の医学史』で、田舎男についてのまた別の話を挙げているが、その男は腹の中に四本のナイフを持っていたという。ナイフには一尋もの長さの鋸状の歯がついていて、しかも天体のように髪の毛の輪っかがついていていたという。さらに、その類のものがいっぱい付着していて、結構な見物であった。いかにしてそれが彼の腹の中に入るに至ったかについては、「まちががなく悪霊の奸計と欺瞞によるものに他ならない」とドナーティは結論づけるのである。ランゲは『医学書簡』1巻38書簡で、こういった作用について数多く記している。クリストバル・デ・ヴェガも同様で、ヴァイエル、シェンキウス、スクリボニウスはみな、上記の現象を、悪霊の狡猾さと幻影によるものとしている。もしその理由をお訊ねになるなら、それは忍耐力を培うためである。テルトゥリアヌスが考えているように、「打倒してその力を示すべく、匹敵するものやライバルとなるものがなければ、徳は徳ではない」からである。あるいはまた我々や我々の信仰を試すためであり、我々の躓きであり、我々の罪への罰である。それらは、トゥールーズのグレゴワールが称しているように「神の正しき復讐の実行者」として、神の許しを得てその行為を行っているのである。『詩篇』78篇49節のダビデのように、「神は彼らの上に激しい怒りと、憤りと、恨みと、悩みと、災いの御遣いとを放たれた」。そのように悪霊はヨブやサウルを苦しめ、人に作用して気を触れさせたり取り憑いたりしたが、キリストがそれを治した（『マタイ』4、8章、『ルカ』4、11章、『ルカ』13章、『マルコ』9章、『トビト』8章3節等）。これは、彼らが信仰に欠け、懷疑的で、弱く、疑念を抱くゆえの罪への罰として起こったと、私は考えている。

### 第3項

#### 魔女と魔術師、いかにして彼らが憂鬱症を惹き起こすかについて。

今まで悪霊が手ずから為し得ることを見てきたが、ここで道具を使って彼らが為し得ることを見てみよう。その方が往々にして手ずから行うより悪いことがあり（それが可能だとしての話だが）、己の復讐心や欲情を満たすために、さらにひどいことを行ったりもする。そのことについてはエラストゥスが「魔女によって召還されなかったとしたら、多くの危害が加えられることはなかったであろうに」と考えている。エンドールの魔女が悪霊に関わることがなかったら、サミュエルの姿を騙って現れることもなかったであろう。魔術師が駆り立てることがなかったら、ファラオの御前であの蛇に扮して現れることもなかったであろう。「魔女がおとなしくしていたら、人も家畜も病に罹ることはないであろう」とエラストゥスはさらに言う。魔女の存在を否定する人は多く、たとえいるとしても危害を加えたりしないと考える。ヴァイエル『悪霊の守護者』3巻53章、オランダの作家ヘルマン・ヴィテキント、ビエルマン、フォン・エヴィッヒ、ノイヴァルトはこの意見で、我が国のスコットはホラティウスを用いて次のように言う。

夢、魔術の恐怖、驚異、魔女、  
夜中の亡霊、テッサリアの前兆を、  
人々は迎える、笑いをもって —

上述の作家達はかのような話を嘲笑っているのである。とはいえ、ほとんどの法律家、神学者、医者、哲学者は逆の立場にいる。たとえばアウグスティヌス、ヘミングセン、ダノー、コホハーフェ、ザンキ、アレテウス等々、デルリオ、シュプレンガー、ニデル『蟻』5巻、キュヤ、バルトロ『審議』6巻1部、ボダン『悪霊憑依妄想』2巻8章、ゲオルク、ダムホウダー等々、パラケルスス、エラストゥス、スクリボニウス、カメラリウス等々。悪霊が提携する人達は次の二種類に絞られる。ひとつは、降霊術師や魔術師のように少なくとも見かけ上は悪霊に命令することのできる者で、その忌まわしく恐ろしい秘儀は『アルバテル』と称する書に記されている。曰く「悪霊は召還されれば、まるで悪魔払いや降霊術にかかったかのようにやってくるが、下劣な魔術師達を自分の不信仰の傘下におこうと居座る」。またもうひとつの類は、国王ジェームズが「いみじくも言ったように、「暗黙の取り決め、あるいは明白な取り決めによって」提携する魔女のように、悪霊に命令される者である。多くの下位区分があって、魔術師、魔女、妖術師、誘術師などその種類はいくつもある。そのうちのあるものについては、これまで寛容に扱われてきた。また魔術は以前には、サラマンカやクラコヴィアその他の場所で公然と表明されてきた。その後には譴責する大学もあり、今ではほとんど否認される。とはいえ、今でも大学によっては「優れた人や、天の特別な恩寵によって伝授された人にしか解らないような神秘のごとく」（とボワサールの言葉を借りているのだが）、実践され、継続され、施行され、「政治であれ、宗教であれ、裁

判であれ、何事も魔術師達にお伺いをたてずして行おうとはしないほどに」王によって大いに認められている場合もある。その昔ネロ、ヘリオガバルス、マクセンティウス、背教者ユリアヌスは魔術に耽溺したが、最近の王や教皇の嵌まり具合はその比ではない。スウェーデン王エリクスは魔法の帽子を持っていて、その力と、何か詞を眩いたり囁いたりすることによって、霊に命じて空気を騒がせ、思いのままの方向の風を起こすことができたので、大風や嵐がおこると民衆は王様が魔法の帽子を被っていらっしゃると言ったものだった。そういった例は無数にある。魔術師達にできることの数は、悪霊にできることの数とほとんど同じで、悪霊は常に魔術師達の欲求を叶え、そうすることでさらに自分に尽くさせるのである。悪霊は嵐や暴風雨を起こすことができるが、既に見たように、ノルウェーやアイスランドでは、普通魔女達がこれをしている。彼らはまた味方を敵に変え、敵を味方に変えることができ、媚薬を使って卑しい愛を来たし、愛を強要し、いかに遠い場所にいっても、味方が何処にいて何をしているかを告げる。そして望まれれば、「恋人を夜の間に山羊の背中に乗せて空を飛び、彼らのもとに連れてくる」。ジグムント・シュレルツ『亡霊の書』1巻9章では自信たっぷりに、何マイルもの遠くから呼び寄せられたそのような多種多様な者達と話し合ったとか、魔女が自分を魔女だと認めるのを何度も聞いたとか報告している。人間や獣、葡萄、小麦、家畜、植物を傷つけたり感染させたりしたとか、女に流産させたり、また不適であれ「不能」であれ、既婚であれ未婚であれ、男も女も、五十のさまざまなやり方で、妊娠しないよう「不妊」にさせたとか、ボダンは2巻2章で言う。また、空を飛び、意のままに何時でも何処でも会うことができるとキコグナは証言し、ラファータは『亡霊』2部17章で「揺籃から幼い子供を盗み悪霊の助けを借りて醜く変えて子供部屋に返す、それを取り替えっ子という」と述べる。シュレルツ1部6章では人間を勝利させ、幸運にも雄弁にもするという。それゆえ古代の決闘や闘技でそれらは求められていたが、魔術的呪文は使われなかった。それらは剣の切っ先やマスカット銃の弾に耐え、決して傷を負わない不傷の身にすることができるという。それに関しては、さらにボワサールの『魔術』6章を読むとよい。そこでは祈願の仕方、誰によって作り出されるか、「遠征、戦争、闘争、決闘等の」何処で、如何に使われるべきか、が多くの個々の事例を挙げて書かれている。それらは燃えさかる炉の中を歩くことができ、拷問台の上でも苦痛を感じないようにさせ、止血し、死者の姿を出現させ、他者をも自分をも思いのままにいろいろなものの姿に変えることができる。ラップランドの有名な魔女アガベルタは、観ている人達の前で公然と「弱々しい老女、高い檜の木、牛、鳥、蛇などとなって」多くを為したものだ。誰もが驚いたことに、人が見たいと思うものなら何にでもなることができたし、その場にはいない友を出現させることも、秘密事を暴露することもできた。とはいえ、この秘事に関しては、リップスが『ストア派自然哲学』1巻17章で詳細に論じているように、「これら魔術師も悪霊も鉞脈から金を持ち出したり、ぎっしり詰まった手文庫から文字を取り出して信奉者達に手渡すことはできない。彼らはほとんど全面的に卑小で劣等、見下げ果てた存在で、ボダンは示すように「裁判官の審判や判決、王の議会協議や機密会議においては」何もできず、また「財務、財政的なことも何も」できない。彼らは顧客にお金を差し出すことも、裁判官の判決や王の評議

を変えすることもできないのである。これらの「卑小な霊」にはできないことであるし、「もっと高位の霊のするようなことでもない」。ひょっとして、魔術師シモン、アポロニウス・ティアネウス、パセテス、イアンブリコス、星界のエウドなどもう少し名の知れた魔術師も時にはいるかもしれない。彼らはしばらくの間だが空中に城郭を築き、軍隊を出現させたりすることができ、実際にしたとも言われている。彼らはまた富や財宝を出現させたり、何千もの人にさまざまな食べ物を突如与えたり、瞬時にしてこちらからあちらへと移動して自分や信奉者を王の迫害から守ったり、秘密事や未来の出来事を見せたり、遠くの国で起こったことを告げたり、ずっと以前に死んだ人を出現させたり、他にも多くこのような神秘を行い、世間を震撼させ、人々を驚愕させ、自分達を神だと思わせた。しかし、最後には悪霊に見捨てられ、彼らは悲惨な最期を遂げるが、ベテンを働く彼らが見つかることは稀もしくは皆無である。技術の拙い者はこういった行為を為すことができない。だが、私の目的に照らして言えば、彼らは、好き嫌いに拘わらず誰に対しても、結局のところ、病を治したり惹き起こしたりすることはできる。このことは憂鬱症に関しても他の病と同様である。パラケルススは『狂気の病』4冊1論攷で、自分の経験からはっきりと「魔法にかけられて憂鬱症に陥る者は多い」と断言している。ダノーも『妖術師』3巻で同様に「憂鬱症をもっとも悲惨な形でもたらした者を眼にした」と彼は言い、「どの医者も為す術がなかったものを、触れるだけで、女の乳を干上がらせ、痛風、中風、卒中、癩癩を治した」とも述べる。ルーラントは『百十の治療例』3.91で青年ディビッド・ヘルデの例を挙げている。その青年は魔女にもらったケーキを食べて急に毫碌し始め、すぐに狂気に陥ったという。フランツ・ヒルデスハイムはその著で憂鬱症の人について論議しているが、その患者が鉄や鉛を吐いたり、習ったことのない言葉を話したりしたので、その病気は生来的なものでもあるが、魔術による部分もあると考えた。しかし、こういった例は、スクリボニウス、エルコレ・サツソーニアなどでは珍しいものではない。彼らが働きかける手段は、通常、たとえばヘクター・ボイスのダフ王の話のような呪文や像、あるいはまたさまざまな金属に刻印された文字の数々、星座の配置、結び、護符、詞、媚薬などで、関わる者に働いて憂鬱症にする。モナウはアコルシウスへの書簡において、媚薬の摂取で混乱の極みに陥ったボヘミアの貴族の例を挙げて詳細に論じている。ただこれらの呪文や像、文字、野蛮な詞に何らかの力があるわけではなく、悪霊が人々を惑わすためにこれらの手段を用いているのである。リバウの言葉を借りれば「悪霊は信仰厚い魔術師に自分の仕事をさせ、自分の悪の行為に荷担させる」のである。

#### 第4項

原因としての星辰。様相、人相、手相にみられる兆候。

自然的原因は、一次的で普遍的なもの、二次的で個別的なものに分けられる。一次的原因には、天、惑星、恒星などがあり、(占星術者達によると)その降り注ぐ力によって、あれやこれやと影響を及ぼしている。ここでついでに、そもそも星は原因なのか、それとも兆候なのかと

いった議論をする気もなく、神罰占星術の妥当性を弁護するつもりもない。ただ、もしセクストース・エンペイリコス、ピコ・デッラ・ミランドラ、シクストゥス・アブ・ヘミンガ、ペレイラ、トーマス・リューパー、チェンバーズといった人達の著作を読み、宿屋や店の看板に描かれた天体などのしるしに力がないと同様、星々や、太陽や月にも力は一切ないと考えたり、経験によって裏打ちされているような占星術的箴言をすべて馬鹿にしたりする人がいるのならば、その人にはベランティ、ピロヴァーノ、マルシュタラー、ゲツケル、クリストファー・ヘイドン卿達の本を読むよう薦めておきたい。また私自身の立場はどうなのかとお訊ねの方には、こう答えるしかない。これらの学説が間違っていることもよくわかっているので、「星辰は力を及ぼしてくるが、強制力はない」と。つまり、必然性はまったくない。その力の及ぼし具合もゆるやかで、賢い人であればその力に抵抗することができる程度である。「賢き人は星辰を支配するだろう」。星辰は我々を支配しているが、その星々は神によって支配されているのだ。この件に関しては、ハーゲンのヨハンが簡潔に示してくれていると思う。「星辰の我々に及ぼす影響はいかほどのものなのかとお訊ねであれば、こう答えよう。星々は力を注ぐだけであり、しかもその注ぎ具合はゆるやかなので、我々が理性によって支配されていれば、影響力は一切ない。ただ我々が己が本性に従い、感覚に導かれるのであれば、星々は野獣に対するのと同様、我々にも容赦なく大いなる影響力を発揮する」というわけで、この件に関してはトマッソ・デ・ヴィオの言葉をもって正しくまとめるのではないかと思う。「天は神の力を伝える媒体」、つまり、神の道具であり、これを使うことで神はこういった基本的な天体を支配し、配列しているのだ。また（よく言われるように）天は星々を文字とする巨大な本であり、そこには不思議なことがたくさん書かれていて、解読可能なのである。はたまた天は「傑出した職人によってつくられた素晴らしいハーブでもあり、神だけがそれを演奏できるのだが、いとも妙なる音楽を作り出すのである」。閑話休題。

「星辰の知識なき医者はいかなる病気（憂鬱症や痛風というまでもなく歯痛）の原因も治療法もわからず、その理解のためには患者の出生時の星位と星の配置を知ることが必要となる」というのがパラケルススの見解である。そして我々の主題であるこの病気に関してパラケルススは、その主たる第一因は天から生じるとし、体液よりも星辰の影響に重きをおき、「他の原因を取り除いたとしても、星座配置だけで往々にして憂鬱症は発症する」としている。彼が例として挙げているのは月の動きによって知性を奪われる狂人だが、別のところでは、他の症状をすべて上昇点と関連付け、憂鬱症の真なる主要因は星辰に求められるべきであるとしている。この見解はパラケルスス一人だけのものでなく、彼ほど有無を言わさぬ言い方ではないが、多くのガレノス主義者や哲学者達によっても支持されている。「このように憂鬱症のさまざまな症状が星辰より生じる」とするのはメラニヒトンで、たとえば「アウグスティヌスの例が最たるものだが、もっとも一般的な憂鬱症は天秤宮で起こる土星と木星の合から生じ、カティリナの場合のようにひどい憂鬱症は天蠍宮での土星と月との交差によって生じる」との見解。ジョヴァンニ・ポンターノは自著10巻13章「天の事物」でこの原因について詳細に論じている。「多くの病気は黒胆汁から



生じるが、熱くなったり、冷たくなったりすることによる云々。この体液は本来冷たいものなのだが、水が沸騰するように熱を帯びやすく、火のごとくはげしく燃え、あるいは、氷のごとく冷たくなり、そこからさまざまな症状、狂気に陥るもの、ひきこもるもの、大笑いするもの、怒りだすものなどが生じてくる」。ポンターノはこの体液のバランスの乱れる原因が主に天体、「火星、土星、水星の位置」にあるとし、次のような箴言を記している。「出世時の太陽の天宮がどれであれ、そのときに水星が処女宮にある場合、あるいはその衝の位置に双魚宮がある場合、そしてその星位で矩象にある土星か火星に水星が照らされている場合、その子は狂ってしまうか、憂鬱症になるだろう」。また「生まれるときに土星と火星のいずれかが正中の位置にあり、もう一方が第四宮にある場合、その子は憂鬱症になるだろうが、水星の影響を受けることになれば、次第に治ってしまう。出世時に月が太陽、土星、あるいは火星と合か衝の位置にあるもの、あるいは矩象にあるもの」（もしくはレオヴィッツの表現を使えば「禍々しい矩象の位置にあるもの」）は「多くの病気の兆候がみられ、特に頭と脳とが有毒な体液の悪影響を受けやすく、憂鬱症、狂人、狂気に陥りやすい」。さらにカルダーノは「日食の際や、地震のとき、あるいは新月第四日に生まれしもの」もそうだとする。ガルツェとレオヴィッツは主たる判断材料を誕生宮の司星に求めるだろう。月と水星の間にいかなる星位も成立せず、いずれも誕生宮にない場合、あるいは太陽か月が人馬宮か双魚宮にあり、その合か衝の位置に土星と火星が来る場合、そのとき生まれた人達は普通、癲癇になったり、毫碌したり、悪魔に取り憑かれたり、憂鬱症になる。ただ、こういった箴言なら前述のポンターノ、ガルツェの33章「誕生星診断」、シェーナーの1巻8章に豊富なのでそちらを参照されたい（特にシェーナーはプトレマイオス、アルプバータなどのアラブ人、ジャンティーニ、ランツァウ、リンダウト、オリゲネスなどから箴言を集めている）。しかし、こういった人々を単なる占星術者とみなし、それゆえ、その判断は不完全だと考える人もいるかもしれない。であれば、今度は医者の見解、ガレノス主義者達自身の証言に耳を傾けてみよう。まずクラトがこの奇妙な病気に星辰の影響が大きく関与していることを認め、これについてはヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデ、ロネリス『卒中についての序論』、フィチーノ、フェルネルなども同意見である。クネミアンダーも星辰こそ普遍因であると認め、両親を個別因とし、ほかに非自然的原因を六つ使っている。パティスタ・デッラ・ポルタは『自然魔術』1巻、11、13、15章で個々の症例すべての原因を星辰に求めている。こういった箴言の真実を示す例は、占星術者達の論攷に多く見られるものである。カルダーノは第三十七星位の例としてマッテオ・ボロニーニ伯を挙げ、カメラリウスの『生誕時間暦』2巻ではダニエル・ガレなどの第六、七星位を扱っているが、これについてはガルツェの33章、ルカ・ガウリコの論攷6「凶兆（Azamena）」等を参照されたい。まとめると、この憂鬱症が生じるときとは、あらゆる誕生星位の天体が占星術によって読み取られ、月が誕生宮にある場合、つまり寿命星となる場合、特にη（土星）や♂（火星）に対して凶の光線を送ったり、凶の兆候を示す場合、はたまた同様の性質をもつ特定の恒星と同様の関係にある場合、最後にη（土星）が転回や通過によって基本的な誕生星に凶となる場合である。

その他、様相、人相、手相に見られる兆候もあるが、これらについては、ハーゲンのヨハンと、手相学を書いたあとすぐにヘッセ方伯のおかかえ数学者となるロトマン、それからバティスタ・デッラ・ポルタがその天体観相学において、占星術との間に類似性があることをすでに証明し、我々の好奇心を満足させてくれているので、ここで紹介するのにやぶさかでない。

観相学者達の一般的見解は以下のとおり。「先天的憂鬱症を示すものは色黒であり、瘦身、毛深さ、太い血管、濃い眉も同様」とグラタロロは7章で述べ、さらにアリストテレスを典拠に小頭、多血質、赤らみは頭部憂鬱症を示すとしている。吃音の人、禿の人も（アヴィケンナが考えているように）脳が乾燥するという理由から極めて憂鬱症になりやすいという。観相学に見られる気質、知性におけるいくつかの兆候についてもっと知りたいという人は、アリストテレスの観相学について注釈、というよりやさしく言い換えたものであるアダマンティウスとポレモ、それからバティスタ・デッラ・ポルタが書いた面白い四冊の本、マイケル・スコットの『自然の秘密』、ハーゲンのヨハン、モンタルト、アントニオ・ザラの『気質の解剖』1部13、14節を参照されたい。

手相学にもこういった憂鬱症を予見する箴言がある。テスニエルはその著書でハーゲンのヨハン、トリカツ、デ・コルヴィ等の見解をまとめているが、その5巻2章で次のように言う。「手首線から手の掌を通して土星宮に伸びる土星線が、その場所で小さな線と交差している場合、憂鬱症を示し、生命線と自然線とが鋭角を形成している場合も同様である」（箴言100）。「土星線と肝臓線と自然線の三本が掌上で大きな三角形を形成している場合も同様」で、これに関しては、ゲッケルが『手相学』5章で、一言一句繰り返している。彼らが総じて出している結論によると、土星宮に小さな線がたくさんあり、交差している場合、「そういった人達は大抵の場合憂鬱で、悲惨、不安や心配や困難が多く、つねに心配な気持ち、辛い気持ちに苛まれて、いつも悲しくしていて、脅え、疑心暗鬼でいる。こういった人達の楽しみは耕作、建築、池、沼、泉、森、散歩などである」。タデアス・ハジェクは『観相学』で額に土星線が見える人に関する箴言を記しているが、そこには憂鬱気質のものが集められている。バティスタ・デッラ・ポルタも体のほかの部位に関する観察を行い、染みが憂鬱と関係があるかのように書いている。「あるいは爪も同様で、爪に黒い斑点ができると、心配や悲しみ、争いや憂鬱が増えることを示している」という。その理由を彼は体液と関連付け、自分の経験を例として挙げている。七年ものあいだ、彼の爪には黒い斑点があったのだが、その間ずっと彼は遺産争いで法廷に巻き込まれ、つねに怖れ、名誉を失い、追放され、悲しみに暮れ、心配事ばかりだったのだが、その悲惨な日々が終わると同時に、その黒い斑点も消えたのだという。カルダーノも『自著について』で自分のことを語っているが、それによると、息子の死の少し前になると、彼の爪のひとつに黒い斑点があらわれ、息子の死が近付くにつれて、その斑点は大きくなったのだという。こういった些細な点について思わず冗長になってしまったが、こういったことを不条理で馬鹿げていると断罪する人もいるわけで、ここ

であえて付言しておきたいのは、ここに紹介した話は住所不定のごろつきやジプシーが語ったものではなく、立派な哲学者や医者や有名な大学の神学教授の書物からとられたものであり、その中にはまだ存命中の人もいるので、自分達の言ったことについて弁護することもでき、揚げ足取り屋や無知な人々に対し、その正当性を主張することもできる、ということである。

## 第5項 原因としての老齡。

二次的個別因も、一次的原因との区別でそう名づけられているだけで、効果は絶大なのだが、これにも「先天的」、「内的」、「生得的」と呼ばれるものと、生まれた後に起こる外的で、偶発的なものとの区別がある。先天的、すなわち生まれると同時に我々に内在するものには、老齡のように自然なものか、(フェルネルが言うように)「自然的でないもの」、つまり我々が親から受け継ぐあの病的状態、遺伝病のようなものがある。誰にでも自然に起こり、生きるものなら誰も避けることのできない二次的原因で最初に挙げられるのは、老齡であるが、老齡は冷たく乾いていて、憂鬱症と同じ性質であり、靈気や実体が減少したり、焦げた体液が増加することによって、憂鬱症を惹き起こす原因となるに違いない。それゆえメラニトンはアリストテレスを典拠に疑いの余地がない真実として、「老齡になると」そのころには過剰になっている「黒胆汁のため老人達はしばしば老碌する」と主張している。またかのアラブ人医者ラーゼスは『続ラーゼス』1巻9章で、年老い衰弱した人々におこる憂鬱症を「必然的、不可避的病」としている。詩篇作者ダビデ王も言うように、「七十年生きたら、誰しもが苦しみ悲しむ」のであり、この真理は年老い衰弱した人に共通して起こることからも確かめられる。その人生において活動的で偉大な役職にあり、多くのことをなし、大いなる指揮権を発揮し、多くの召使を抱えていた人々は特にそうで、カール大帝が息子フェリペ二世に王位を継承したときのように、突然、一線から退く。そういった人達はあっという間に憂鬱症に征服されてしまい、もし仕事を続けていると、ついには老碌してしまい、(老年とは二度目の少年期ともいうくらいで)、年齢からくる避けられない病弱さゆえに自分の治めていた土地を管理できなくなってしまう。痛みと哀しみと悲嘆にくれ、再び子供となり、痴れ者化し、老人達は無骨な振る舞いをなすかと思うと座りこみ、独り言を言う。彼らは怒りがちで、皮肉屋、何事にも不満をもらし、「あらゆるものを疑い、強情で、欲張りで頑固」(とケケロ)、「わがままで、迷信深く、うぬぼれ屋で、自画自讃を針小棒大に繰り返す」というバルダッサレ・カスティリオーネの言葉も的を射ている。こういった老齡による病弱が特に顕著なのは、老婆や、貧乏で孤独なうちに最底辺の生活で乞食をする輩、あるいは魔女と呼ばれる人達で、ヴァイエル、パティスタ・デッラ・ポルタ、ウルリクス・モリトル、フォン・エヴィヒにいたっては、魔女達がすると言われていることをすべて想像力とこの憂鬱症気質に関連づけている。そして議論の余地は残るところだが、魔女達が家畜に魔法をかけて殺してしまうこと、煙突の上から天秤棒にまたがり空を飛ぶこと、猫や犬などに変身すること、瞬間移動して会合する

こと、また魔女特有の踊りを舞い、悪魔達と肉体を交わすことなど、こういったことすべて、その原因が魔女のうちに溢れるこの過剰な黒胆汁と、催眠薬と、悪魔の業というべき諸自然因に帰せられている。「魔女達が危害を加えるわけことはまったくなく、こういった驚異をなすわけでもなく、その脳みそが狂っているだけなのだ。自分達は魔女で、危害を加えることができると思っではいるが、実際のところ、そんなことはない」とは『ラミア』3巻36章でのヴァイエルの見解だが、ボダン、リューパー、ダノー、スクリポニウス、セバスチャン・ミシェーリス、カンパネッラの『物事の知覚』4巻9章、イエズス会士ダンディーニ（『魂について』2巻）はこの見解を論破、キコグナも詳細に論駁している。ただ彼らが否定しているのは、魔女達が自分達と周囲を騙し、そういった作用をもたらす奇行を行うのは想像力が腐っているだけだという考え方で、魔女達が憂鬱症であるという点を否定しているわけではない。

## 第6項

### 原因としての両親、遺伝による蔓延。

憂鬱症のもうひとつの内的で先天的原因是は、我々が両親から引き継ぎ、身体の一部もしくは全体にある気質であり、フェルネルが「自然的でないもの」と呼ぶものである。というのも彼が正しく示しているように、「両親の、特に父親の種が、それと似た同じような身体を生じるのであり、さらに父親が生殖時に罹っている病は、精子とともに子供に受け継がれる」。息子の気質は父親の気質と同じであり、息子は父親が自分を作るときに罹っていた病気に罹ってしまう、つまり「息子は父親の土地を継承するだけでなく、その病気も継承するのである」。そしてロジャー・ベイコンが言うように、「父親の四体液や体質が腐敗していると、それと同じ四体液と体質が腐敗することが息子も避けられず、すなわち体液の腐敗も父から息子に引き継がれるのである」。またヒポクラテスの説によるとこの遺伝は、身体の形、「体質、身体の大きさ、傷、容貌だけでなく、むしろ心の有り様や状態に強く現れる」という。

そして父の習性は精子とともに息子に受け継がれる。

ただトログスが15巻に記しているように、セレウクスという人には太腿に錨の痣があったが、その子孫達にも同じ痣があったという。またプリニウス7巻17章によると、半盲であったレピドゥスの息子も半盲であったという。かの有名なエノバルビ家は、古くから赤ひげで知られ、その名前もそこから由来している。オーストリア人の唇、インド人の低い鼻、ババリア人のあごも遺伝するもので、ブクストルフが示しているように、ユダヤ人の飛び出た目もそうである。ユダヤ人の場合、その声、歩き方、仕草、表情も同様に、その他の状態や病気とともに引き継がれている。母親と娘の場合も同じである。レメンスが主張するように、親の性向は「子供達の性向に引き継がれ、子供達の悪意や病状も多くの場合、その原因はすべて両親に帰せられる」。よって憂鬱症

もまた遺伝病であることには疑いの余地がないと思う。パラケルススも『魂の病』4部1致ではっきりとこのことを断定しているし、クラトもモナウへの書簡で認め、ブルーノ・ザイデルも『治療不能な病』で同意見である。モンタルトは11章でヒポクラテスとプルタルコスを典拠に、このような遺伝体質が頻繁に起こることを証明し、(ある患者について語りながら)「この患者の憂鬱症は親と共通する黒胆汁の不均衡から生じている」と述べている。思うに、この人は憂鬱症の分け前に与ることによって憂鬱症になったのであろう。またダニエル・セネルトは1巻2部9章で憂鬱症気質は父親から息子にのみ受け継がれるのではなく、「家族全員に受け継がれることがある」としている。フォレストゥスはこの点を、臨床から例証し、自分の患者である商人が遺伝によってこの病気に罹ったことを述べている。同様に、ロドリゴ・ダ・フォンセカも1巻診察69で、「母親の憂鬱症が原因で憂鬱症になり、憂鬱症的生活をし」、ひどい生活態度をとる若者の例を挙げている。スペインの医者ルイス・メルカドは最近著した遺伝病についてのすぐれた論攷『著作集』5巻2部で、ガスコーニュ地方のガルボット人のように、癩病、痘、結石、痛風、癩癧などを遺伝病として挙げ、とりわけ、この憂鬱症と狂気が、生誕後しばらくして多くのものに発症するとしている。彼はこれを自然界における驚異と称し、憂鬱症はけっして治療することのできない性向として子供達に取り付くことを指摘している。さらに驚くべきは、この病気がある家系では父親を飛ばして息子に引き継がれることがあり、「つまり隔世遺伝、ときには家系の三番目ごとに遺伝することで、必ずしも同じ症状ではなく、似たような、類似の症状を生じることである」。このように生じる二次的原因は大抵の場合、強力で、(ヴォルフィウスが主張するように)「しばしば、一次的原因である天の配剤を変えてしまう」ほどである。おそらく、教会と国家、つまり人の法と神の法とがともに、そういった婚姻が結ばれることを禁じることで、遺伝病を避けようとしてきたのはこういった理由からであろう。またメルカドはすべての家系に、もし自分達の家系を愛し、公共の善を重んじるのであれば、「可能なかぎり、極力性質の異なる」相手と結婚するよう、自分達とは容姿がもっとも異なる人達の中から相手を選ぶよう忠告している。思うに、まさに神の特別な思慮によって定められてきたことなのであろう、あらゆる時代に、少なくとも六百年に一度は、大地に蒔く種を変えるように、血筋を改め、清らかなものとするため、民族の大移動があるべきとされ、実際、大抵の場合そうであった。またゴート族とヴァンダル族の大移動が起こったこと、ヨーロッパやアフリカの多くの地に、スカンディアや(ある説によると)サルマティアの大陸から大多数の人々が洪水のごとく押し寄せてきたことも、公益のため我々の体質を変えるために起こったことであろう。こういった人々は、欲情と不節制ゆえに罹った遺伝病のために大いに苦しんでいたのだから。頑強で有能な人々からなる健全な世代は我々の種族から送りだされたものだと言えよう。というのも北方人種は大抵の場合、無害で、暴動を起こさず、病気にも罹らないのであり、しかも我々の血は緩和され、今日における哀れにも裸でいるインディアン達よろしく健全になっている。(最近のある作家が記しているように)ブラジル付近のマラグナン島にいる人々は、遺伝病のほか、あらゆる感染に罹らず、医者助けがなくても、普通、百二十歳以上生きると言われ、このことは、オーケイドやその他多くの地域でも

同様だという。気質と気質の乱れによって生じる共通の効果はこのようなものであるが、ここで個々の事例に移り、どのように、あるいは誰によってこの病気が我々に引き継がれて行くのかを示したいと思う。

老人から生まれた息子達がいい気質であることはめったにない、

とショルツは診察 177 で想定している。よって、そういうものはこの病気にとっても罹りやすい。さらにリーヴェン・レメンズ曰く、老人の息子は大抵の場合、強情で不機嫌でふさぎ込んだ憂鬱症気質で、陽気なことはめったにない。またカルダーノが考えるように（『医学逆説』1巻5論逆説 18）、満腹時に子供をつくると、病弱な子か、狂った息子が生まれる。両親が病気の場合、頭部に大きな痛み、偏頭痛、（ヒエロニムス・ヴォルフィウスが例として挙げているセバスチャン・カスターリオの子供のように）頭痛がある場合、あるいは酔っ払いが子供をつくった場合、その子がすぐれた脳を持つことはほとんどない（ゲッリウス 12 巻 1 章）。「酔っ払いの子は酔っ払い」、とプルタルコスが『問答集』1巻問5で言っているが、この点はレメンズも1巻4章で同意している。またアルサリオ・ダラ・クローチェの『書簡による医術問答』3巻182、マクロヴィウス 1巻、アヴィケンナ 3巻 21 序 1 論 8 章、そしてアリストテレス 2 節 4 にあるように、馬鹿で酔っ払い、あるいはお頭の軽い女性から生まれる子供は、大抵の場合、親と似て馬鹿でのろまであり、さらに月経中の女性と寝た場合もその結果は同様である。過剰な性欲は、レメンズが特に水夫達に多いと非難しているが、経血の流れや月経を気にもとめず妻と交わり、憂鬱症の主要因、有害でひどい原因となり、ポルトガル人ロドリゴ・デ・カストロもそのような交わりは致命的で、疫病を生じると言っている。また医者達はそういった交わりをする男を忌み嫌い、月経四日目にできた子供は大抵の場合不運で、狂ったり、耄碌したり、馬鹿になったり、病気がちになったり、不潔で、病弱、疫病に感染したり、生命力が弱く、心にも体にもいい面がごとく欠落している。そしてたとえ健康であったとしても、エウスターチやエルコレ・サッソーニアなどが言うように、「難産になる」。ユダヤ人達はキリスト教徒にみられるこの種の不潔で汚らしい交わりを激しく非難し、自分達の間では禁止している。そしてキリスト教徒に癲病と狂気になるもの、また膿胞、痂皮、白い斑点、疥癬、皮膚と顔の褪色に苦しむもの、伝染病で激しく、悪性の病気にかかるものが多いのは、この不浄な交わりが原因なのだとし、不浄な経血が流れ出る月経四日目に臆面もなく性交するものは、自分の子供にたいして残虐行為を行っているとは非難している。かつてこの行為は神の法によって有罪とされ、これを行ったものは死をもって罰せられた（『レヴィ記』18, 20）。そしてそこから生まれた子供達が奇形であったり、不具であったとしたら、父親は不浄な女性との交わりを我慢できなかったとして、石打ちの刑に処せられた。また大司教アウグスティヌスがグレゴリウス法王に、ブリタニア人の間でこういった交わりを寛容すべきかどうかと訊ねた際、法王は月経の間、女性達に夫と性交を行うことを厳しく禁じた云々。この部分、英訳はさし控えることとしよう。不節制な生活態度を原因に挙げている人達もいて、にんにくやたま

ねぎを食べ過ぎたり、過度な断食を行ったり、勉強をしすぎたり、悲嘆にくれすぎたり、心が鈍重で、意気消沈したり、考えが混乱していたり、脅えたり等していると、カルダーノが『精妙さについて』18巻で言うように「そのときできた子供達は狂気や憂鬱症に大変なりやすい。というのも、そういった行為の際に、そういった原因で脳の靈気が混乱し、悪影響を受けていると、生まれてくる子供達の脳も混乱することとなり、その子供達は一生、鈍重で、怯え症で、満たされることはない」。さらに、賢人の子はたいい馬鹿である、という逆説、問題を持ち出し、その正しさを主張する人もいる。スイダスの挙げる例は文法学者アリストアルコスで「彼には二人の息子、アリストアルコスとアस्ताゴラスがいたが、どちらも馬鹿だった」。エラスムスは『痴愚神礼讃』で馬鹿が賢人を生む、とこの逆説に拍車をかけている。カルダーノは『精妙さについて』12巻でこの理由を、「賢人の自然靈気は勉学によって溶解し、動物精気となり、心臓、そのほかの臓器から脳へと引き上げられてしまうからである」としている。レメンスはカルダーノの説を支持し、別の理由として「賢人達は、パウロの言うその責務を妻に果たすとき、ぐずぐずしているので、そのためにその子は虚弱体質になったり、多くの場合、白痴で馬鹿になってしまう」としている。

次に挙げられる理由は、母親特有のもので、そこから生じるものである。フェルネルの『医学総論』1巻11章によると、受胎の際のみならず、妊娠中に母親が過度に鈍重であったり、怒ったり、わがままで、不平不満を言ったり、憂鬱症であると、その息子も同様に発症し、しかもさらにひどくなることもある。またレメンスが4巻7章で付記しているように、母親が悲嘆にくれすぎたり、動揺している場合、あるいは災厄に脅えたり、見聞きした恐ろしい物に慄いていると、その子は危険にさらされ、その気質も害されてしまう。というのも、女性が奇妙なことを想像すると、子供に影響するからで、パティスタ・デッラ・ポルタが『天の観相学』5巻2章で証明しているように、母親は子供のうちにしるしを残すのである。このしるしは、特にある種の食べ物を過度に求めてしまう者にみられ、その子もやはり、その食べ物が好きになり、フェルネルが言うように、母親に似た体液に毒されてしまう。また「妊娠中の女性がウサギをみると、その子はしばしばいわゆる兎唇になるという。ガルツェが33章「ユダヤ人の生殖」で挙げている注目すべき例では、ブランデブルクで「1551年に生まれたトーマス・ニッケルという人は生まれてから死ぬまで毎日、こけそうなくらいの千鳥足でふらふら歩いていたのだが、その原因は母親が彼を妊娠中に通りで千鳥足の酔っ払いを見たからだ」という。これと似た例がマーティン・ヴァインリッヒの『怪物の起源についての覚書』17章にもあって、曰く、「私はドイツのヴィッテンベルクで死体みたいな人に会ったことがあり、その理由を訊ねてみると、自分がまだ子宮にいるとき、母親がたまたま死体を見てしまい、ものすごく怖がったものだから、その恐ろしいイメージが刷り込まれ、息子である自分も死体ようになってしまったのだ、と応えたのだった」。

我々が父親の欠陥によって苦しむことになったり、罰を受けることになったりするには実にさまざまな場合があって、「健康に生まれることは、我々にとって最大の幸福であり、心身とも

に健全なもののみが結婚するのであれば、人類にとっての幸せとなるだろう」とフェルネルが言うのも正鵠を射ている。農夫は最良で選りすぐりの種しか土地に蒔かないし、牛や馬を育てるのも、全身に不具が認められない場合のみであり、その血統が確かめられない限りは、雌と交配させない。我々は羊の場合、最良の仔羊を選び、牛の場合は形のきれいな仔牛を育て、最良の犬を飼う。であれば、自分達の子供をつくる時には、より細心の注意を払うべきではないか。かつてはこの点について注意深く、厳しい国もあり、心身の面で子供が曲がっていたり、奇形であったりすると、処分されたという。クルティウスの話によれば、同様のことはインドでもかつて行われていた。また当時の規律に従い、統制の行き届いた国でも多く行われていた。またヘクター・ボイスによると、かつてのスコットランドでは、「父親から息子へと遺伝しやすい危険な病気、癲癩、狂気、痛風、癲癩に罹った人がいると、その人はすぐさま去勢され、女性の場合は、男性から隔離された。そして、そういった病気にかかった女性が妊娠していることがわかると、その人は胎児もろとも生き埋めにされた」という。ただこれは、民族全体が害を被ったり、腐敗してしまうことのないよう、公共の福利のために行われたことである。厳しい罰で、キリスト教徒には適用されるべきではない、というかもしれないが、調べてみる価値はある。というのも、我々はこういったことに関して気楽になりすぎて、結婚したいという意志のある者すべてを許し、自由気ままにあらゆる結婚に対して寛容であるために、遺伝病は大いに広まっているからである。どの家系も安全ではなく、いかなる人も、あれやこれやの重病にかかる危険がある。しかも選択の余地なく、今でも年長の者が、種馬のごとく結婚することになっていて、さらに金持ちであれば、その人が馬鹿や痴れ者であっても、足萎えや不具であっても、無能で不節制、自堕落であったり、暴力沙汰で疲弊していても結婚している。ある人曰く、「長男は遺産によって賢明で有能」ということになるのだろう。こうして我々の世代は腐敗し、心身ともに病弱な人が多く、たくさんの強烈な病気が猛威をふるい、家系も狂って、親こそが、我々の破壊者となっている。我々の父親は劣悪であり、それゆえに我々はさらに劣悪になっていくのだ。

\* 太字表記は原文がラテン語もしくはギリシア語等であることを示す。

#### テキスト

(底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.).

Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*.

Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbrook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.



既訳

「第1部 第1章 第1節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第59号 2007 所収

「第1部 第1章 第2, 3節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第60号 2008 所収

(2009年9月30日受理)

(おかむら まきこ 文学部文化学教授)

(かわしま のぶひろ 大阪学院大学准教授)